
Sperm Business

GFJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sperm Business

【Nコード】

N3129G

【作者名】

GFJ

【あらすじ】

『精子バンク』を利用して妊娠しようとする女性マリアと、ドナ―登録をした大地。近未来を想定した二人をめぐる物語です。

第1話 マリア

「国籍は？」

「え？ 国籍？ …… 日本人で」

「血液型は？」

「血液型ですか？ いえ、別に何でも構いませんが……」

「その他希望はありますか？」

「希望……ですか？」

「背が高いとか、目が大きいとか、ストレートの髪とか、頭がいいとか、まあ、いろんなご希望があると思うんですけど。特に希望がなければ、コンピュータでランダムに抜粋することになります」

ライフスタイルが大きく変わった。

子供は、体外受精がメインになり、精子バンクを利用する女性が年々増加していた。

岡島マリア、三十一歳。独身。両親は彼女が小学6年生の時に離婚し、以後、母の手によって育てられた。父親の暴力が離婚原因で、そのため家庭裁判所でも経済的に養育困難とされながらも母親が親権を獲得したのだ。

マリアは何度か恋をした。あれほど憎んだ父なのに、選ぶ相手は父と似ていた。自分でも驚きだった。父と違うタイプを選んだはずなのに、交際途中で相手が次第に自分を力で支配しようとしていることに気づく。そのたびに、自分に引き継がれた母親からの負の連鎖を呪った。父親と似た男を選んでいるのか、それとも、相手を父親のような人間に自分が変えているのか、それはマリア自身にもわからなかった。気づけば逃げようとしても逃げられない状況に追いやられている。交際中の相手の中に粘着質の父親の姿を見出し、では、沸き出でてくる激しいアンビバレントな感情に彼女は苦しみ

られた。

母親は酒場で働きお金を貯めたあと、マリアが高校2年の頃に独立して小さなスナックを開業した。本当に狭い店だった。母がどんな苦勞をしてきたのか、マリアは具体的に知らなかったけれど、何となく母親の身体から放たれる目に見えない粒子の色で感じていた。そのことは決して口にしなかった。思春期特有の潔癖さから、母を汚らわしいと思ったこともあったが、彼女が必死にマリアを守ろうとしていることも同時に感じていた。そして、恋をするようになってから、母親の深い悲しみが理解できるようになって、自分が母親を嫌悪した理由をも悟った。自分の中に流れている血が彼女に母親と同じ道を歩ませようとする、その運命に必死に抗っていただけなのだと。

学問のない母親は、自分と同じ惨めな思いを娘にさせたくなかった。女の身を守る最大の武器は決して女ではない。学問を身につけること、それが幸福になるための必要条件であるというのが母親の出した結論だった。

マリア自身も男性の力を借りずに自分の足で生活していく将来像を小さい頃から思い描いていた。結婚に甘い夢を見がちな年齢になってもマリアは決して結婚に憧れることはなかった。結婚を考えたことがない、と言えば嘘になる。しかし、彼女の数少ない恋は、結婚の幻想を抱こうとする途端にそれを破壊した。いよいよ自分には結婚は無理なんだと確信させただけの恋。彼女にはそれを打ち破るだけの経験がなかった。

マリアが大学に進学し、心理学を専攻するようになったのは、自分が辿ってきた格闘の日々の意味を理解するためでもあった。母親はマリアが大学に進学するというだけで喜んでくれた。心理学であることが経済学であることが文学であることが、実際のところ、その違い

もよくわかりはしなかった。

自分の心理を理解することによって、場合によっては現状打破の可能性があるかも……、心の奥底にそんな期待があったかも知れない。父に対する憎悪の感情を克服することが、結果的に幸福な結婚への道へ繋がるかも知れないと。

しかし、残念なことに、そうは行かなかった。時代は、個人の願望を手に入れるのに、より積極的な方向へと進んでいた。個人の多様性を尊重する方向。あるいは、煩わしい規制が取り払われた方向……。以前には考えられなかったライフスタイルの選択肢がマリアの目の前に提示され、彼女はまぶしいまでの光が自分に降り注いでいることを感じた。皮肉なことに、そのことをはつきりと彼女に教えたのはマリアがK大学に入学し心理学を専攻したことに深く関係していた。

彼女が先進的な生殖医療を取り入れている病院のことを知ったのは、大学2年の夏休み前だった。それは臨床心理学の教授をしている畑先生の噂がきっかけだった。女医でもある畑教授は、未婚の母である。二人の子供は専任のベビーシッターが面倒を見ているという噂、そして、精子バンクで計画妊娠をした、という噂。クラスメート達が興味津々でひそひそ話に花を咲かせている、そんな中で、マリアの心臓は高鳴った。

……そんな方法があったか。

最初につぶやいた心の声。ぱあっと明るい未来が開けた気がした。クラスメート達の意見は否定的な物が多かったが、

「男なしで子供を作れるのはいいよね。うざいじゃん」という楓^{かえで}の意見を否定する者はいなかった。『畑教授が精子バンクを利用したこと』に対する否定的な意見の本音には、欲しいものを全て手に入れたしまった（ように見える）彼女に対する嫉妬心が多分に含まれていた。自分達にそういうことをするだけの勇気がないことの裏返しでもある。誹謗中傷は覚悟してるはず、という言葉の奥にあるの

は彼女達の妬みに他ならない。畑教授は米国の精子バンクを利用し米国で出産した、そして、利用した精子はどうやら日本人のものらしい、というのがもっぱらの噂だった。米国の精子バンクで日本人の精子が手に入ることや、その提供者について、皆、好き勝手なことを噂した。

精子バンクのことを知らなかったわけではない。ただ、自分とは無縁だと思っていた。ところが、目の前にモデルケースが突然現れた。それも、あの、美人で有名な、天から二物も三物も与えられている畑教授のような女性が、わざわざ精子バンクで妊娠する、という手段を取っているという事実。胡散臭さしか感じられなかった『精子バンク』というシステムに、マリアは強烈に惹きつけられた。全てが解決できる。父親の残像に苦しめられることもなく、結婚という手段を取ることもなく、母親になることができる！ しかも、自分の人生を設計する上で、煩わしい恋愛から結婚へのステップを踏むことなく、好きな時期に妊娠できる。マリアにとって、こんなすばらしい手段を取らない、という手はなかった。

大学在学中に畑教授の存在を知ってから、マリアは『精子バンク』で妊娠、出産をするという漠然とした考えを暖めてきた。このアイデアは、いろいろな意味でマリアを自由にした。恋愛の可能性を全て捨てたわけではなかった。ただ、彼女にとつての『精子バンク』は、最終的に頼ることのできる『保険』であった。『保険』のお陰で結婚に対して強迫観念を抱く必要がなかったものの、それが却って彼女を結婚から遠ざける原因となった可能性もある。

結局、三十歳を超えて、彼女は、この『保険』を使うことを決心し、実行に移したのだった。

第1話 マリア（後書き）

長いお休みを頂いていました。ようやく重い腰を上げ、新しい連載を始めることにしました。

今回も医療系の物語ではありますが、前作とは趣を変えて綴っています。と思います。

毎週木曜日に更新予定とします（変更もあり得ます）。

次回は、3月12日（木）に更新予定です。

第2話 カタログ

「カタログが入用でしたら、準備できますが」

マリアが子供の具体的な希望を持ち合わせていないことに気づいて、相談窓口の女性は慇懃な物言いをした。これ以上長つたらしい説明するのは時間の無駄と感じている口調でもあった。

実際マリアには『精子バンク』で精子を手に入れる、ということ以上の計画がなかった。彼女にとって『精子バンク』は、煩わしい過程を経ずに妊娠するための手段に他ならなかった。人生の設計図を綿密に練ることができるとい言わば補助的な手段。夫や夫側の家族という厄介な人間関係に悩まされることもない、結婚に付随する様々な不必要な物を何一つ抱え込むことなく自分の自由にできる。それだけで充分だったしそれ以上のことを考えたこともなかった。

マリアには具体的な子供のイメージはなかったものの、自分自身についてははっきりした未来像を描いていた。最初は妄想だったものが、時間が経つと共に次第に具体的な計画へと変わって行った。二人の子を産むとしたらすぐにでも一人目を妊娠しなければならぬ。正直言って、少しずつすぎたかも知れないと思っている。マリアにとって、『精子バンク』がもたらす将来は、輝かしいキャリアの道を犠牲にせずに子供まで持つことができる、そんな絵に描いたような成功した女性像、そう、畑教授というモデルケースそのものだった。

ところが、『精子バンク』を利用する多くの女性にとってその意義はもつと別の点にあった。これまでなら手が届かなかった優れた遺伝子を誰でも手に入れることができる、それこそが『精子バンク』の持つ最も魅力的なセールスポイントなのである。競争率の高い男性の遺伝子を簡単にゲットできる、それも男性の気を引くために、自ら容姿に磨きをかけたり、多大な労力を費やす必要がない、ライ

バル女性を蹴落とすために汚い手を使う必要だつてない、平和的に誰でもが自分の欲しいものを手にする、そのどこが悪いと言うのか、マリア以上に割り切った考えの女性が世間には溢れているのだ。

希望を聞かれて、何一つ子供に対する具体的なイメージを持っていなかったマリアを、担当の女性は半ば呆れたように見た。地中海病院不妊外来の相談窓口で、マリアは世の女性達がいかに先進的であるかを思い知らされた。

「貪欲になられていいのですよ。凡そご希望の精子を提供できると思います」

初めて尋ねた不妊外来。実際には自分が不妊症かどうかもわからない状態で受診したことに少なからずの後ろめたさを感じていたマリアは、あつけないほど割り切った考え方の今の生殖医療に驚くと同時に、決してマリアが欲張りではないことを示されたみたいでほっとするのを感じていた。

マリアは、カタログを購入して、家に帰ってじっくり検討することにした。3冊セットで5万円、プラス3ヶ月有効のパスワードがついている。新しい情報は、インターネットを使って期間限定で確認することができるのだ。カタログとインターネットの情報サイトの中には沢山の丸秘情報が詰め込まれている。あとは、体験談を収めた薄い冊子がオマケとしてついていた。

マリアは、バッグをソファに投げ出しジャケットをハンガーにかけてからキッチンに入ると、ワインレッドの冷蔵庫からアイステイラーを出してグラスに注いだ。キッチンは壁も含めてワインレッドの世界だ。

一人暮らしするには少々広すぎる高層マンションの一室。リビングから見える景色はマリアの一番のお気に入りだった。しかし窓を開けると強すぎる風が室内に吹き込むのでほとんど開けたことがない。リビングの家具はシックなダークブラウンで統一してある。

ソファに深く腰を沈めて、マリアはカタログを広げた。40ページほどのカタログ。

一冊目。才能重視型。

表紙を開くと、ページの端に4色の色分けがなされている。

最初の赤く色分けされたページには、有名大学の理科系出身者たちの登録ナンバーが表になって掲載されていた。ただし、大学名ははつきりと書かれていない。Sグループ大学、Aグループ大学、Jグループ大学……とグループ分けされている。大学名まで明記されていないのは、個人が特定されにくいように、ドナー側への配慮なのだろう。大学クループ名の後には、学部名、身体的特徴、その他特筆すべき事柄が簡単に書いてあって、最後の欄は値段。登録ナンバーの上にSOLD OUTの赤い小さなシールが貼ってある欄が散見された。

黄色いページは、有名大学文系出身者。

青いページは、音楽、芸術関係。

オレンジ色のページは、スポーツ関係。

2冊目。容姿重視型。

漫画チックな似顔絵つき。

赤色は、体格に関するもの。

黄色いページは、顔に関するもの。

青いページは、肌の色。

オレンジのページは、髪の毛の特徴。

同じ登録番号の人が、1冊目、2冊目で繰り返し登場してくる。

3冊目。性格に関するもの。

赤色は統率力のある人たち。会社役員だとかベンチャー企業経営者だとか、そういう人たちが載っている。

黄色は協調性の強いと思われる人たち。

青いページは優しい人たち。どういう基準で選んでいるのか今ひとつよくわからない。

1人1行から2行ずつの情報。気になった登録番号を2つ3つ組み合わせで全体像を想像してみたりする。候補者を絞ったら、1人の情報につき、3万円でもう少し詳しい情報を掲載したプロフィールをもらうことができる。この段階で数十万円使う人もいるそうだ。

SOLD OUT の登録番号には興味が湧く。値段も高いものが多い。いくつも魅力的な特徴を有した男性のものだろう。

一方で、青い文字の NEW！ にも目が行く。新しく入荷した精子っていう意味だろう。

マリアは、今、自分が座っているソファを選ぶ時に、散々迷ったときのことを思い出していた。ダークブラウン基調の家具が多い中、ソファは軽い感じの物にしたかった。ところが、これがなかなか難しい。色と形と座り心地。部屋の中で変に浮いても困るし、ダークブラウンと調和を取りながら、なおかつ、明るい雰囲気ソファ。全てを満たす物がなかなか見つからなかった。カタログで散々探したり、家具屋にも足を運んだ。ところが、ただっ広くてどこまでも白い展示場の中に陳列してあるソファを、頭の中で自分のマンションの中に置き換える作業は思うように行かない。実に3週間かけて選んだソファだった。それなりに気に入ってはいるが、これが3週間もかけて選ぶような物だったか、マリアにはよくわからない。使い慣れると、それなりに自分の物になったが、購入して部屋に入れたばかりの頃、最後まで悩んだカタログのソファの方が良かったのではないか、とふと感じたことを思い出した。それが一体どんなソファだったのか、マリアはもう思い出せなくなっている。ほんのり淡いピンク色、クリーム色と言われればそうかな、と思うほど、僅かにピンク色を呈したソファは、部屋に運び入れると、展示場でみた時ほどには上品に思えなかった。重厚な色の部屋の中では、もっ

とビビッドな色の方が部屋全体が引き締まって見えたのかも知れない。

『精子バンク』で精子を手に入れる、という作業は、マリアにとって想定外の困難さを伴った。彼女の初期の目的は、とにかく精子を手に入れて妊娠すればいいだけのことだった。ところが、不思議なもので、カタログを見るうちに、欲が出てくる。桁外れの値段がつけられた登録番号に SOLD OUT の文字が躍っているのも彼女の欲に火をつける一つの誘因だった。いつそのこと、コンピュータに任せてみようか、とふと思ったりする。だが、待てよ。ランダムに選ぶ精子とは一体どんなものなのか……。売れ残ったり、安い値段しかつかない物の寄せ集めなのではないか……。わざわざ高値で飛ぶように売れていく物をランダム精子に入れるわけがない” お楽しみ袋” と名づけられたバーゲン品なのかも知れない。粗悪品を掴まされたくないければ、自分のほしい子供のイメージをある程度思い描いておかなければならない。

1週間ほどカタログを見つめては、あーでもない、こーでもないと考えるうちに、マリアは疲れてきた。しばらく考えるのを止めることにした。仕事中にふっとカタログが頭の中に出てきて、自分が『精子選び』のためにノイローゼ気味になっていると感じたからだ。5万円で手に入れたカタログは、しばらく本棚に立てられたままになった。

第2話 カタログ（後書き）

次回は、3月19日（木）に更新の予定です。

第3話 カウンセリング

マリアがそれなりの収入を得られるようになったのは、ある意味、ラッキーだったと言っている。

駆け出しのカウンセラーの時期にシェリーと出会わなければ、今のマリアはないだろう。シェリーは失恋の真っ最中で、その時期にマリアはシェリーを支えた。シェリーは当時17歳で、透き通るような肌をした少女だった。父親がロシア人で、その影響だろう、第一印象は、モデルのような子だな、ということだった。

半年ほどの付き合いになるだろうか。姿を見せなくなって二年ほどしたある日、シェリーがテレビで歌っているのを見て、マリアは驚いた。

「あの子だ……」

長身で針金のようなスリムな身体、低音から高音までよく響く声。男性二人とシェリーの三人ユニットだった。あの頃よりシェリーはさらに女性らしくなり、生きている躍動感に満ちていた。

彼女が芸能界入りして爆発的人気を博すようになって、マリア指名でのカウンセリングが増えた。芸能界で活躍している若い女性が立て続けに三名ほどやってきた。シェリーの紹介だった。不思議なもので、芸能人がマリア指名でカウンセリングを申し込んでくると同時に一般人のクライアントも増えた。決定的だったのは、シェリーがブログで、マリアのことを紹介したことだった。自分が苦しんでいた頃に勇気を持って相談に行ったのが良かった、とさりと書いてあった。10代20代の女性クライアントが一気に増えた。

周囲のやつかみが始まった。組織の中で行動することが窮屈になつて、マリアはオフィスを構えることにしたのだ。さらに、捌くことのできないクライアント数を制限するために、時間単価を上げることになった。

カウンセラーでマリアほど幸運に恵まれた者は少ないだろう。忙しくはあるが、毎日が充実している。カウンセリングは半分がオフィスで、残り半分がオフィス外である。個人で出張カウンセリングに出かけることもあったし、それ以外に複数の大学で学生向けカウンセリングを請け負っている。提携している大学からの報酬は、安いものだった。それでも、マリアは、その仕事を続けた。大学キャンパスが好きだったからかもしれないし、安定した仕事先だったからかも知れない。

運の強さも味方して、マリアの仕事は順調だった。経済的にも恵まれてきたし、充実もしていた。仕事に関して言えば、全てがトン拍子に進んだ。マンションも手に入れた。少しずつ、畑教授に近づいていく。あとは、最後の計画を実行するだけだった。

「ちゃんとしてたつもりなんです。だけど、こんなことになって…」

「相手には話した?」

「……」

「そこからじゃないかな。相手ときちんと話をして」

「言いたくない……」

「そう……。どう……したいのかな? これから」

「分からない。でも、今の状況で産めるはずないと思う」

「墮ろす……ということ?」

その質問をした所で、女子学生は顔を伏せて泣き出した。マリアは黙って、彼女が落ち着くのを待つ。

大学内に設けられたカウンセリングルームで、女子学生とマリアは向かい合って座っている。

基本は話を聞くこと。カウンセラーが自分の意見を押し付けるのではなく、本人に自分の状況を認識してもらって、自分の考えを整理してもらう。大抵の場合、答えは本人が持っている。カウンセリングを受けに来る子は、皆、答えがほしいのではなくて、話を誰かに聞いてもらいたがっている。理想論を押し付けたり、説教をしたところで、何の解決策にもなりはしない。本人の考えを上手に引き出すことが大事だ。

他人のカウンセリングはある程度上手にできるようになったと思う。でも、一番厄介なのは、自分自身のカウンセリング。職業が笑うよね。学生相手に、いかにも人生の達人みたいな顔して相談受けるのに、自分のことはどうすることもできない。大学で心理学を学んで何だかいろんなことがわかったような気になってるけど、実は何一つわかつちやいない。父親に対する憎悪の念を克服できずにいるのに、堂々と学生の話聞いてる時、激しい自己嫌悪を感じるときがある。私、こんな所で何やってるんだろうって。恋愛から逃げる道を選んで、安易に精子バンクで精子を手に入れようとしている私。不妊症に苦しんでいる人とは明らかに違う。動機が不純かもって思う。精神が不健全じゃないかって思う。マリアは『精子バンク』を使うことに踏ん切りがつかずにいた。割り切って考えてきたつもりなのに、実際に自分がそれを行動に移そうとすると、途端に彼女の中の何かがブレーキを踏んだ。

精子バンクの受付の雰囲気は、深く考える方がどうかしている、と思わせる何かを持っている。ポジティブに行きましょう！ クヨクヨ考えないで、先に進みましょう！戸惑っているマリアの背中を押す。

でも、本当にいいんだろうか。ソファを選ぶように精子を選んで……。

目の前にいる学生は、身籠ったことを彼氏に告げること、彼氏

を失うのではないかと恐れている。産むかどうか自分自身で答えを出してから彼氏に告げるかどうかを決める、と言う。彼女の話聞いているうちに、マリアは、彼女がまだ口にはしない彼女の答えを感じた。多分、彼女は、一人で墮胎して、そして彼氏にはそのことを言わずに済ますつもりなのだ。その後、二人の関係がどうなるのか、それはわからない。彼女は、彼氏を失うことの恐怖よりも、むしろ、子供を持つことでこれまで描いていた人生の計画が大きく変わることを予期しおびえているのである。どんな言葉で誤魔化そうとしても、マリアの中の女の勘がそれを感知した。彼氏を失う云々は大きな理由じゃない。それが一番の理由なんだと彼女自身が自分を欺こうとしているだけ。

神から与えられた命を自分の都合で墮ろす。それがどういうことか。説教じみたことを言いたくなる自分がいる。

「産むか墮ろすか、それはどちらか一方しかないからね。中間という選択肢はないよ。それから、こんな大事なことを共有できない二人の関係ってどうなのかな」

何を言っているのだろう。まともに恋愛関係も築けない私が……。

ああ、自己嫌悪。マリアの心と言葉は乖離している。

それでも、女子学生には、マリアの言葉が何らかのヒントを与えたようだった。

「確かに、今までと同じように接していくことは難しいかもしれない」

少し考えたい、と彼女は言った。来週もしかしたら、またカウンセリングをお願いするかもしれませんが、と頭を下げて、カウンセリングルームから出て行った。一人で墮胎して彼氏には黙っておこうという最初の考えとは違う答えを持って、来週マリアの前に現れるかも知れない。それが果たして彼女にとっての最善の答えなのかどうかはわからない。それでも、もう一度しっかり考えてみる、という次のステップを踏めたことは確かだろう。

いろんな難問を抱えて、学生がやってくる。カウンセラーとしてどうしてやることもできない問題もある。少しヒントを出すだけで答えが見つかる場合もある。医療機関や公的機関にマリアから助けを求めることもある。何でもあり。経済的な問題、恋愛問題、親子の問題、友人関係、一つだけではなくて、いくつかの問題の糸が絡まってることもある。

マリアという名。もともと嫌いだった。日本人らしくない名前。親は何でこんな変な名前をつけたんだろうと思う。漢字ならともかく、カタカナのマリア。『マリア先生』、学生達は彼女のことをそう呼ぶ。そんな風に呼ばれるようになってから、『マリア』も悪くないかなと思うようになった。聖母マリア。救世主マリア。カウンセラーとしてはいい名前かも。でも、マリアは自分自身を助けられない。

精子バンクのことをしばらく考えないまま毎日が過ぎた。本当言っと、考えない、のではない。ふっと頭をよぎることはしょっちゅうだ。（何だろう。心にひっかかっているもの。私が考えなければならぬもの）、時の流れの壁にザラザラした凹凸があつて時々それに接触してしまう。ふっと考え込む。あ、そうか、精子バンクか、……それは後回し。そんな風に意識的に凹凸から遠ざかる。そういう毎日だった。

次の週、例の彼女がやってきた。マリアはすっかり彼女のことを忘れていた。似たような相談を結構受けるからだ。長いストレートの髪と、くりくりした大きな目を見て思い出した。

「彼とは別れることにしました」

何かを吹っ切ったようなそんな明るい表情の彼女が目前にいた。

「え……」

予想外の答えだった。

彼に妊娠のことを告げたのだろう。そして、二人の意見が合わない

かった。どちらがどのような希望だったろうと思考をめぐらしている、彼女は小さく微笑みながら言った。

「結局彼には妊娠の話、しなかったんです」

「え……、あ、そう……」

という事は、つまり、最初の直感通り、彼女は墮胎することを決めて、そして、彼にも何も言わない道を選んだんだな。ただその時の直感と違っていたのは、この時点でもう彼と別れようと決めた点。「マリア先生、アリガト。一人で産んで、一人で育てていきます」は？ 何……何ですって？

「この前、先生に相談してから、私、いろんな生き方を考えてみたんです。彼は歌手デビューするんだって、アホみたいな事言ってる。^{ひいきめ}鼻眞目に見ても、彼が歌手になれるなんて思えません。見た目はいいから彼氏として付き合う分には悪くないけど、そんなアホと将来一緒に生活していきません。だったら、この際、別れてしまった方がずつとすつきりするし。この前、先生、こんな大事なことを共有できない関係なんてって言いましたよね。アレ聞いてわかったんです。相談すれば間違いなく慌てますよ。彼、子供だもん。何も考えてないんです。答えもわかってるし」

はあ。私の顔は、その彼氏よりもアホな表情になっていたに違いない。私は口を半開きにして彼女を顔を呆然と見ていた。

「そう……なの。学校は？ 学校はどうするつもり？」

「このまま通います。このまま行けば大学卒業するのが2年後、だけれど1年ぐらい休学しようかなって思ってます。すると、卒業する時には子供は2歳。保育園探して卒業と同時に就職できたらいいなっと思っています」

スラスラと今後の計画を話してのける。嬉しそうな表情が印象的だ。しかし、果たしてそんなにうまく行くだろうか。

「ご両親には？ 相談したの？」

「お母さんがね、産んじやいなさいって。旦那は将来足手まといになるだけだけど、子供はいいよって。一緒に育てようって言うてく

れた」

「はあ。母親が勧めたのか。何だか複雑な思いがする。

「でも、本当にそれでいいの？ 結婚したいって思った時、なかなか難しいことにもなるかも知れないよ。それに将来、子供がお父さんの事を知りたい、なんて言わないかしら。彼だって何にも知らないわけでしょう？ 何だか彼にも気の毒な気がするし」

「マリアは、自分で何を喋っているのか分からなくなってきた。彼女に堕胎を勧めているのだろうか。この前は堕胎を非難するようなことを言っておきながら。相談されている方が動揺してどうするのだ。マリアは自分自身に「落ち着け」と言い聞かせる。

突然、彼女は笑い出した。

「先生って、意外と古いんですね。今は、精子バンクで子供を作る未婚女性もいっぱいいるんですよ。どこの誰とも知らない男の精子を金で買って妊娠する女がね。少なくとも私の場合、子供ができる過程で彼氏との間に愛情はあった。精子バンクは最初っから愛情なんてないじゃないですか」

いきなり直球と真ん中。マリアはひっくり返りそうになった。

「自分の子供が宿ってるって思うと、自分の身体が愛しくて。早く会いたいって思います。私の赤ちゃんに。良かった。先生に相談して。お母さんに正直に話したら、最初はびっくりしてたけど、全てが一気に解決しました。本当にありがとうございました。マリア先生のお陰です」

第3話 カウンセリング（後書き）

次回は、3月26日（木）に更新予定です。

第4話 体験談

彼氏との間にできた子を彼に黙って産もうとする女子学生。倫理的に問題にならないのだろうか。万が一、将来、子供が父親を探し当てたら……。突然、見知らぬ子供が目の前に現れて「あなたの子です」と言われたら、彼は慌てるだろう。

その点では、精子バンクの方は、父親にその覚悟がある。自らの意思で精子を提供しているのだ。契約が結ばれている。相手がどんな女性かわからないだけで。

女子学生は『精子バンク』を利用する女のことを軽蔑することによって自分を正当化しようとしていた。一方私は、彼氏に内緒で彼氏の子供を産もうとしている女子学生の倫理性に疑問を持つことで『精子バンク』を利用することを正当化しているのだろうか。……いや、自分の心理分析はやめておこう。

不本意な妊娠をして、本当ならかなり悩み苦しむであろう時期に、実に短期間のうちに立ち直りに成功した女子学生。カウンセラーとして手助けできたことを喜ぶべきところかも知れないが、マリアはやはりひっかかりを感じていた。輝くような笑顔で未婚の母の道を選んだ彼女……。

時代はより進歩しているのだ。女性を取り巻く環境が一昔前と比べるとずっと女性に有利になってきた、とも言える。でも、そうでもないかと日本の少子化に歯止めがかからなかっただろう。これはきっといいことだ。今だにいわゆる世間では『精子バンク』について否定的な見方をする傾向が強いが、それでも10年前と比べると隔世の感がある。マリア自身の捉え方も変わった。マリアが『精子バンク』を利用することを非難されるとしても、一時的なことに違いない。

それにしても、精子を提供するってどんな気持ちなんだろうか。

不気味な感じがしないのだろうか……。どこの誰に使われるのかわからない、自分の遺伝子を半分持った見知らぬ子供が自分の与り知らぬところで誕生するのである。パンフレットには沢山の登録番号があった。それだけ多くの男性が、自ら進んで精子を提供しているのだ。案外、深く考えずに登録しているのかも知れない。マリアはふっとパンフレットに並んだ無機質な番号の羅列を思い出していた。

もう一度、パンフレットを見てみよう。5万円も支払ったのだ。本棚の片隅に追いやってから実に3週間が経過していた。

パンフレットを取り出す。3冊のパンフレットと薄い体験談集。他人の体験談なんてあまり読みたいと思わなかった。でも、3週間の間に、『精子バンク』を利用する人たちがどういう人々なのか、マリアは知りたいと思うようになっていた。

38歳。主人が精子減少症です。不妊治療を受けても、なかなかうまく行きませんでした。養子を取ることも考えましたが、できれば、私自身が出産したいと思っていました。主人以外の人の精子を使うことに最初は抵抗がありました。今では、『精子バンク』を利用して良かったと思っています。ドナーの方の体格にはこだわりました。なるべく主人と似た人を選びました。何人か候補を選び、最終的には主人が決定しました。血液型もあわせました。娘は今3歳になります。おかしな話ですが、主人に似ていると言われます。主人も娘をとても可愛がっています。こんな幸せが待っているなんて想像していませんでした。本当に心から感謝しています。

そうか。本来、こういう人が利用するのが筋なんだろうな。幸せそうな雰囲気漂っている。恐らく夫婦揃って、少なくとも時間を不妊治療に当ててきたのだらう。心からおめでとう、と言いたい気持ちになる。

27歳。独身。バツ一。子供が授かる前に離婚しました。ここを利用した理由は、登録者数が多いことが第一。雰囲気良かったのが二番目の理由。私はスポーツジムでテニスのインストラクターをしてる。精子バンクではスポーツ選手の精子を使った。息子は幼稚園の頃からかけっこが速く、現在地域のサッカーチーム『リトルボーイ』に入ってて選手として活躍中。とても満足してる。お勧めです。

なるほどね。マリアは自分の同類だと思った。不妊症治療ではなく、結婚せずに精子を頂こうというパターン。しっかりスポーツ系の精子を使ったわけだ。

40歳。5年前に主人が白血病で他界しました。主人との間に、女の子が一人います。一人っ子では可哀想だと思い、『精子バンク』を利用しようと思いました。迷いもありましたが、今を逃したらチャンスがなくなると思いました。色々調べてみたら、地中海病院が一番良さそうだったので、お願いしてみました。少々お値段は高めですが、良かったと思っています。『精子バンク』を利用するのに最初は後ろめたさがありましたが、今では、迷っている方々に勧めたい気持ちで一杯です。私は再婚する気はありませんでしたので、もしも『精子バンク』を利用しなかったら、娘は一人っ子のままだったでしょう。男の子を産みました。上の子がそれは喜んでくれて、ミルクをあげたり手伝ってくれます。天国の主人もきっと喜んでくれていると思います。

39歳。不妊症でした。原因を調べましたが結局わかりませんでした。恋人とは別れました。自分のキャリアを優先してきたことは事実です。それが不妊の原因なのかも知れません。27歳をピークに年齢が上る毎に妊娠能力が極端に落ちていく、ということを私は知りませんでした。卵も卵管も子宮も正常だと聞いて、逆に苦しみ

ました。自分の生き方が間違っていたのだろうかと思い悩みました。37歳になって急に子供がほしくなりました。どんな手段を使っても子供がほしい、それが当時の私の正直な気持ちでした。たとえば世間から白い目で見られようとも、私にとっては最後のチャンスだったのです。顕微授精で妊娠しました。女の子で現在6ヶ月です。とても幸せです。

いろんな人がいるんだ。みんな背景が違う。

33歳。一人目の子は米国の『精子バンク』を利用しました。今回は、二人目で、『精子バンク』を使うことは始めから決めていました。地中海病院を選んだ理由は、優良精子を数多く取り揃えていることです。一人目は、米国人の精子を使用しました。今回は日本人のを使用しました。長女の遺伝学的父親は、IT産業で注目されている人です。ようやく日本でも、自分の好きな精子を選べる環境が整ったことを嬉しく思います。長女は、常にクラスで一番の成績を取ってきました。うまい具合に父親の遺伝子を引き継いでくれたようです。親の私が言うのも何ですが、理数系の能力は本当にすばらしい。私には『精子バンク』以外の子作りは考えられません。地中海病院は、クライアントの心情をよく理解されていると思います。選ぶ権利は誰にでも与えられています。あなたにも最高の人生を送るための道が開かれています。何も躊躇する必要はありません。

この人のは、体験談というよりも、病院の宣伝文句のようであった。米国に長く住んでいたのだろうか。考え方が日本人離れている、マリアはそう思った。

米国で精子バンクを利用した……。それは、畑教授と共通する要素だった。

一度、畑教授に会ってみよう。マリアの中に忽然とその考えが浮かんだ。

マリアは大急ぎで畑教授に手紙を書いた。大学で学んだ畑教授の授業が面白かったことなど社交辞令を述べ（もつとも、彼女の授業が面白かったのは事実である）、個人的に相談に乗って欲しいことを丁寧にお願いした。キャリアと個人の生活のバランスについて悩んでいるのだと、曖昧な表現で。実際には『精子バンク』について聞きたかったわけだが、一卒業生の手紙にわざわざ返事をくれるという期待は抱いていない。ダメもとの手紙である。当たり障りのない書き方しか出来なかった。

ところが、手紙を出して二日後、メールで返事が来た。マリアは手紙にメールアドレスを記入しておいて良かったと思った。

「来週の水曜日、二時から十分くらいなら時間が作れそうなので部屋まで来れますか？」というものだった。分刻みのスケジュールをこなしているはずの教授から、こんなに早く、しかも会ってくれるという嬉しい返事が来たことにマリアは驚いた。

懐かしい大学の校舎。銀杏並木を通って旧校舎へ向かう。『臨床心理学教室』は四階にあった。秘書に取り次ぎをしてもらい、まもなく、教授室に通された。

ショートカットがよく似合う知的美人。マリアが大学を卒業してずいぶん経つが、教授の美しさは、ますます洗練されているように感じる。講演会や研究会で人前に立つことが多いためかもしれないかった。

マリアは、畑教授に勧められるままソファに腰掛ける。2、3分簡単な話をした所で、教授は突然切り出した。

「何？ 相談って。精子バンクについて聞きたいなんて言うんじゃないでしょうね」

マリアの心を見透かしたような問いかけ。そして、マリアの顔を見て、高らかに笑って言った。

「いいわよ。あなたが一番知りたいことについて話をしましょうよ。」

あなたにとっても私にとっても貴重な時間ですものね」

滞在時間15分くらいだったろうか。その間にも隣の部屋からはひっきりなしに電話がなる音と秘書が対応している声が聞こえた。廊下の外には、業者だろうか、背広を着た男性二人が畑教授を待っているのが伺える。

畑教授は、すぐに本題に入った。

「私はバツ一なの。結婚して一年で破綻した。もう結婚はコリゴリ。勿論、将来は分らないけど。私にとって『精子バンク』は、ぎりぎりの決断だったの。年齢的にね。『精子バンク』という選択肢が無かったら多分私は今でも独りだったでしょうね。仕事を優先してきた女性のうち、少なくとも人たちがそういう道を歩んできたのと同じようにね。時代に恵まれたと思う。ぎりぎりだったけど。でもあの時、米国に住んでいなかったら、それも、なかったかも知れない」

畑教授に結婚歴があることをマリアは初めて知った。マリアは、自分が今悩んでいることをかいつまんで喋った。地中海病院まで行ったこと。とつくに決断していたことなのに、実行に移そうとしたら急に不安になってきたこと、などを。

マリアの悩みを一通り聞いた後、教授は簡単なアドバイスをした。「世間体が気になるんだったら『精子バンク』を利用することはやめた方がいい。でもね、我が子は可愛いものよ。私には、愛里と未来、私の子供の名前なんだけど、この子達がいる。私にとっては、今一番大事なもの。今では子供抜き的人生なんて考えられないわ。私のことを特別視する人もいるけれど、私の生活は、他のシングルマザーと何一つ変わらないのよ。精子バンクを利用したことをいつまでも気にしているのは、私以外の人間。いつも逆に教えられるあなたは『精子バンク』を利用したのよって、私にとっては重要でないことを掘り起こしてくれる人間、そう、あなたもその一人ね」

マリアは、頭を垂れた。

「すみません」

畑教授は豪快に笑った。

「いいのよ。一人で仕事も子育てもしていくのは大変よ。その覚悟があるのなら、考えてみたらいいわよ。精子バンクで子供を産もうが、恋愛結婚やお見合い結婚で子供を産もうが、あるいは、養子を取ろうが、そんなことは私に言わせればどうでもいいこと。大切なのは『育てる』ということなんじゃないかしら。精子バンクを利用するというのは、手段の一つであって、大事なものは、産んだ後に、愛情を注ぎながら責任を持って育てるってことなんじゃないかな。私はそう思うけど」

畑教授らしい考え方だと思った。

もう一度、地中海病院へ行ってみよう、マリアはそう思い始めていた。

第4話 体験談（後書き）

次回は、4月2日（木）に更新予定です。

第5話 出会い

マリアは、カタログを広げ、その中からいくつか気に入った登録番号をチェックした。コンピュータで最新情報を見ると、七名のうち二名の精子はすでに売り切れている。最終的に五名の情報をつき合わせてしばらく考えたのち、その中の三名の詳しい情報をもらうことにした。

翌々日、大学でのカウンセリングを終えて、マリアは仕事道具をいっぱい詰め込んだバッグを持ったまま、地中海病院へ向かった。大学では時間が足りないこともあるが、暇な時もある。時間を無駄にしないよう、沢山のグッズを入れて通うのである。午前中一杯大学で過ごし、午後からは、オフィスに予約が入っている。途中、遠回りをして地中海病院へ寄った。時計を見ながらの行動になる。

地中海病院の産婦人科受付には数名の患者がいた。一番奥の不妊外来へ向かう。受付を済ませ、マリアは、依頼原稿の見直しなどをしながら順番が来るのを待った。

「これ、落とされたでしょ？」

見知らぬ青年がマリアのオフィスを訪ねてきたのは、彼女が地中海病院を受診した翌日だった。マリアは彼がドアを開けて入ってきたとき、クライアントかと思った。しかし、男性が差し出したピンクの封筒を見て、すぐに、マリアの落し物を届けてくれたのだと理解した。書きかけの原稿の入った封筒。カウンセラー向け専門雑誌の出版社から依頼されていたもので締め切りが近づいていた。封筒は、中に入っている原稿とは全然関係なく、オフィスに送られてく

る定期購読雑誌の入っていたものを再利用したものだ。女性雑誌用の可愛い封筒のあて先にはマリアのオフィス住所とマリアの氏名が記されていた。

彼女のオフィスは、青空通りから一筋入ったビルの3階にあった。壁はオフホワイトの地にパール光沢の入った水色のラインが入っていて、そこにはめ込まれたマジックミラーになった大きな窓が特徴的である。1階にはコンビニエンスストアとクリーニング店、そして足裏マッサージ店が入っている。3階の1番東奥がマリアのオフィスで、隣に歯科クリニック、その横が司法書士事務所、そして、西側には広告代理店が入っている。

外からは、カウンセリングルームと分らない作りになっている。利用者が人の目を気にせずに入れるように。完全予約制であるのは、クライアントの便宜のため、というより、マリア自身が動き回って仕事をするために、という事情の方が大きい。今日はたまたまオフイスの日だった。予約のクライアントが来るまでに10分程度あったが、それこそ、途中まで仕上げていた依頼原稿がどこへ行ったのか青くなつて探している最中だった。

「あ……、ありがとうございます。どこに……？」

「地中海病院一階のソファに。封筒のあて先が持ち主だろうって勝手に考えて」

ソファ？　一階のソファに座った覚えはない。彼の記憶違いだろうか。それとも誰かが一階に封筒を運んだのだろうか？　何のために？　マリアは色々な可能性を考えたが真相が分かるはずもなかった。

つい、今しがた、あわてて地中海病院に電話をしたが、落し物として届けられていないことを告げられた。念のため自分の名前と封筒の特徴を伝えて電話を切ったのだ。目の前に探していた封筒が差し出されて、マリアは心底嬉しかった。

「あ、ど、どうぞ。コーヒーだけでも、今準備しますから」

人懐っこそうな愛くるしい目をしたその男性は、ニッコリ笑って、「じゃあ、ちょっとだけ、ご馳走になろうかな」

と答えた。意外だった。辞退するだろうと思っていたからだ。だけど、良かった。何となく、何のお礼もできずに終わるというのは余りにも申し訳ない気がするからだ。

マリアは椅子を勧めて大急ぎでコーヒーの準備をした。手を動かしながら訪問客のことをあれこれ考えた。珍しい人ではある。普通、落し物を拾ったらその職員に渡すだろう。わざわざ落とし主の職場まで持ってくるなんて面倒なことをせずに。それに、封筒のあて先の人間が持ち主とも限らないのではないか。もし違ったらどうするつもりだったのだろう。親切な人だろうとは思う。それでもマリアは彼が少し変わっていると思わずにおれなかった。

来客用にしまっているコーヒーカップを二客取り出し、水道水で簡単に洗ってからふきんで外側の水気を拭き取るとマリアはポットのお湯を注いでカップを暖めた。そうこうするうちにコポコポとコーヒーメーカーが音を立て、二人分のコーヒーが落ちたことを告げた。

「すみません、気の効いた物が何もなく。コーヒーだけですけど、良かったらどうぞ。お口に合うといいんですけど。お砂糖はどうなさいますか？」

「いえ。甘いものは苦手なんです。ありがとうございます」

カップを右手で持ちながら彼は言った。

「ロイヤルコペンハーゲンですね。確か2003年のカップ」

「お詳しいんですね」

「趣味でコレクションしてるんです。あ……いや、お恥かしい。大の男が変だと思われるでしょうが、好きなんですよね」

ドキッとした。彼はコーヒーカップが好きだと言っているのだが、「好きなんですよね」という発音に不覚にも胸がときめいてしまっ

た。

コーヒーに一口、口をつけると、青年は、

「コーヒーはいつでもどこで買われるんですか？」

と尋ねた。

「中央デパートの地下にある島田コーヒーで」

「なるほど」

「……」

何かなるほど、なのだろう……。美味しいコーヒーだと思うんだけど。まずいんだろうか。それとも、なるほど、美味しいはずだ、という意味なのだろうか。

「ところで、失礼なことを伺ってもいいですか？」

「え、ええ……」

「もしかしたら、地中海病院の精子バンクを利用されているのですか？」

唐突に、恥部を覗き込まれた気分になった。

「ど、どうして……」

心臓がドキドキしている。これだけうるたえてしまうと、今更隠すことなんてできそうにない。

「あ、いや、ごめんなさい」

青年は、シマツタという顔をした。自分の質問が不適切だったとようやく悟ったのだろう。

「実は、書類を拾ったの、一階のソファじゃなくて、産婦人科センターの受付だったんです」

嘘をついていたのか。どうして？

「職員に渡そうと思ったんですけど、少々お待ちください、と言って、職員は少しの時間、書類整理のようなことをしていた。時間にしたら1分くらいかな。その間に、ボクの気が変わった。あなたと話してみたいって思ったんです。いや、ごめんなさい。変に思わないで下さい。いや、変だと思わない方がムリですよ。ただ、精子バンクを利用する女性ってどんな人たちなんだろうと、いつも思っ

ていたんです。精神構造とか……」

つまり、彼は、『精子バンク』を利用している私という人間に興味を持って、ここに来た、と、そういうわけなのか……。コーヒーなどを出している自分が間抜けに思えてきた。少し無用心だったかも知れない。

「きつい性格の女性ばかりを想像していたので、あなたを見たとき意外な気がしたんです。こんな普通の人が利用するんだなあって。ああ、すみません。実は、ボク自身が精子を提供する側だもんで……」

精子提供者！ あの、カタログに載っていた沢山の登録番号の中の一人……。へええ。マリアは、自分に興味を持たれたことに対する不愉快さを忘れて、今度は、目の前の彼に興味を持ち始めていた。「もし、よろしければ、今度一緒にコーヒーを飲みに行きませんか？ とびきりうまいコーヒー店を知ってるんです」

とびきりうまいコーヒー店。つまり、島田コーヒーはまずい、ということだ。これで一つ彼の発した言葉の疑問が解けた。そして、お世辞を言うのが上手でないという彼の性格も。コミュニケーション能力はあまり高い方ではないだろう。彼の質問はいつも唐突でスムーズな流れというものを形成しない。真意のわからない、こちらが戸惑う言葉がポツリポツリと飛び出すのだ。

「コーヒー、好きなんですね」

マリアは、返事にならない返事をした。

「ええ、まあ。ご迷惑のようですね。どうもすみませんでした、強引に押しかけて、コーヒーご馳走になって、失礼な質問をして」

うつむいた彼はまるでリスみたいで可哀想に見えた。

「いいえ。……いいですよ、コーヒー。どんなに美味しいコーヒーなのか、是非連れて行ってください」

どうせ彼は、『精子バンク』を利用する女がどんな人間なのか知りたいだけなのだ。そして、同じく、私も、彼に興味を持っている精子提供者である彼という人間に。マリアは、目の前の青年がどう

いう人物なのか、つきとめてやろうと思いはじめた。

第5話 出会い（後書き）

明日更新の予定でしたが、明日の都合が悪くなりましたので早目の更新となりました。

次回は、4月9日（木）を予定しています。

第6話 大地

管野^{かんの}大地^{だいち}、28歳。自分が精子提供者になるなんて想像できたかどうか。彼がその話を持ちかけられたのは、優秀大学工学部大学院に在学中のことだった。一学年上の松江^{まつえ}貴宏^{たかひろ}に「『精子バンク』のドナーを探しているらしいからお前も協力しないか」、そんな風に声をかけられた。

「精子バンク？」

大地にとって考えたこともない世界だった。

当時の彼の頭は”熱に強く、しかも環境に優しい新素材”を作り出すこと、それ一色に染まっていた。学位を取るため、掛け持ちで三つの研究を同時進行でやっていたが、当たれば大きいのがこの課題だった。ただテーマが大きすぎて一步も踏み出せないまま終わる可能性もまた大きかった。そのため、保険としてあと二つの研究を手がけていたのだ。試行錯誤の末、大地はわずかながら成功への感触を掴んでいた。ここまで来ると捨てるわけに行かなかった。大地は必死だったのだ。

研究室の片隅にある汚れたソファ。それは大地のベッドとして活躍していた。黄土色のソファは年代物で座面は擦れて一部スポンジが中から飛び出していた。廃棄処分の話が持ち上がった時、大地は一人死守したのだ。必要があれば折りたたみ式の簡易ベッドを置けばいいじゃないか、と言われた。邪魔になるというのだ。海水浴場でよく目にする簡易ベッド、パイプにビニールが巻きつけられただけの、あれだ。そんな物で毎日過ごす気はなかったし、何より大地にはそれを買う金もなかった。結局、崩れかけた汚いソファは大地が大学院を卒業するまで廃棄処分が延期された。

ボロアパートには三日に一度帰ればいい方だった。大抵はシャワーを浴びるのが目的だった。食事は、主に大学内にある売店と学生

食堂を利用し、たまに近所の定食屋に出かけた。

女性に興味がなかったわけではない。しかし『面倒』という方がずっと大きかった。女性の誘い方も大地は知らなかった。

大学一年の時に、一度だけ女性とつき合ったことがあった。最初の頃こそ楽しかったが、次第に楽しいことより面倒なことが増えた。女は急に怒ったり拗ねたりしたが、大地にはその展開が理解できなかった。よくわからないので説明を求めると、そのことが余計に女を怒らせたりした。そして、最終的に、実にくだらないことで相手の気分を害したのだと理解したが、理解したところで、どういう対処をすればいいのか、全く検討がつかなかった。大地にとって科学と女性とはまるで対極にあった。

それから何度か恋をしたが、いつも告白しないまま終わった。勇気がなかったのではない。女性は遠くから眺めておくのが一番いいと思ったのである。勝手に女性のいい所だけを思い描いて、美しいままで終わらせたかった。幻滅したくなかったし生活をかき乱されるのも好まなかった。それは水槽の中を泳ぐ美しい熱帯魚を眺める時の満足感に似ていた。自分が水槽に入って魚と一緒に泳ぐのは馬鹿げている。

大学院に進んでからの大地は、多忙と金欠、という二つの理由からますます女性とは縁遠くなった。

ふつと自分の将来を考えることがあった。ボクは将来結婚するのだろうか、という漠然とした”疑問”である。自分のやりたいことを犠牲にせずに結婚生活を送ることが可能だろうか、という不安でもあった。”結婚”ほど大きな博打ばくちはない。

好きなことができれば大地はお金も最低限でいいと思っていた。学食で食べる安い食費とボロアパートの賃貸料、あとは、電気代だとか水道代とか、ほとんど基本料金に毛が生えたような金額だった。週に四コマ、学習塾で理科の講義をすれば生活には困らなかった。

た。週六コマに増やせばもう少しリッチな生活ができただろうが、大地にその気はなかった。

結婚すれば、こんな自由な生活を全て手放すことになるだろうか。恐らく100%に近い確率で……。中には結婚しても自分のやりたいことを強引に貫き通す男もいるだろう。だが、自分にそんな生き方ができるとは思えなかった。マリッジブルーというのがある。大地には彼女さえもないのに、結婚のことを考えるとブルーになった。

『精子バンク』の話は初めて聞いた時、大地は正直くだらないと思った。

悪い話ではない、と思ったのは、松江から話を聞いて丁度一週間後だった。学食で蕎麦^{そば}をすすっていた時、ふつと蘇ったのだ。その時には軽く聞き流しただけの話。先輩から声をかけられ無下に中断させるわけにはいかなかった。内心迷惑と思いつつ、適当に返事をした。

(一) 不妊に悩むカップルが沢山いること。精子提供はそういう人々を救う社会貢献である。

(二) タダで精子の数とか運動能力とかを調べてもらえるらしい。

(三) 金がもらえること。しかも優秀大理科系出身者の精子は人気商品であること。

松江は三つの利点を強調した。

大地には、精子バンクが社会貢献なのかよくわからなかった。困っている人を助ける行為と、それが社会にとって有益であるかどうかは、ものさしが違う。ものさしが違う物をくつつけるのは欺瞞^{ぎまん}である。しかし、精子の検査をタダで受けられるのと金がもらえるのは魅力だった。

もう一つ。結婚せずに自分のDNAを残すことができるという利点がある。松江にとって『利点』とは思えなかった四番目の利点。"結婚"することに不安を抱いている大地にとって自分の子孫を残

す一つの有力な手段になるという点に気がついた。結婚せずに子孫を残すことが可能であり、しかも、自分が育てるよりずっと恵まれた環境でDNAが育まれる可能性をそこに見出したのだ。これは悪い話ではない。育てるのは不妊症に悩むカップルである。子供を産み育てることへの情熱は高いに違いない。情熱だけではない。経済的余裕がなければ『精子バンク』を利用することはできない。情熱と経済的背景、DNAを託す相手としてこれ以上の何を望むだろう。蕎麦を食べ始めた頃に思い浮かんだ考えは、汁をすすり終わる頃、確固たる決意に変わっていた。人間が動くのは「社会貢献」などという美しい言葉故ではない。もっと利己的な理由である。大地は自分が「利己的な」理由で精子バンクを利用しようとしていることを自覚していた。

大学院を卒業し、大地は助手として大学に残った。研究三昧の日々。結婚を意識していたなら、企業への就職をまず考えただろう。しかし、自分にはその必要がない。安い給料でも、自分ひとりで生きていくには充分すぎる額である。『精子バンク』のお陰で大地は自由になることができた。

大学は教育機関でもあるから、何かと雑用が多かった。それでもサラリーマンになることを考えるとどれだけ幸せな道だろう。大地は、大学院生の頃から暖めていたアイデアを実行することにした。

松江が持ちかけた話は純粋な『精子バンク』であった。精子を買い取り、貯蔵管理し、オーダーがあれば産婦人科や個人に提供するという、“精子のみ”を扱う株式会社だった。海外へも発送しているらしかった。

大地は『精子バンク』について色々調べた。そして、地中海病院が一番いい、という結論に達したのである。無料の精子検査、金、が目的ならどの『精子バンク』でもいいだろう。しかし、大地にとっては精子の行方^{ゆくえ}が大事であった。恵まれた環境で自分のDNAが

育まれることこそが、精子を提供する目的である。自分が利用者を指定できないのは残念であるが、もともと不妊症カップルのための制度であって提供者のためではない。養育費用も支払わずに自分の子供を育ててもらえるのだ。そこは我慢しなければならぬ。しかし、提供者にだって『精子バンク』を選ぶという道は与えられている。

地中海病院の『精子バンク』は産婦人科センター内にあつて、基本的に地中海病院で不妊治療、出産する人のためのバンクである。それは、『精子バンク』を運営する上での重要な建前でもあつた。嬉しいことに、提供者が自分の精子に”院内限定”という条件をつけることができた。唯一ドナーに与えられた権限と言って良かった。これは、地中海病院にとつてもプラスになるからこそ取り入れられている。この条件のついた精子がほしかったら、地中海病院で出産しなければなりませんよ、という条件なのだ。他の病院よりも割高な地中海病院で。しかし、それは大地にとつても有難い方針だった。少なくとも、購入者が、地中海病院の『精子バンク』を利用し、地中海病院で出産するくらいの経済的余裕がなければならぬのだ。その後の教育にもしっかりお金をつぎ込んでもらえるだろう。また、万一、未熟児で予定より早く出産せざるをえなくなつても、あそこなら新生児センターがあるので助けてもらえる可能性も高い。大地の望みを大筋で叶えてくれる所だった。勿論、大地の書類審査、面接、血液検査、精子検査の全てをパスし、商品として登録され、さらに、その商品がほしい、というカップルが現れなければ大地の望みも何もないのだが。

第6話 大地（後書き）

次回は、4月16日（木）に更新予定です。

第7話 ドナー申請

インターネットで申し込みをした後、分厚い資料と書類が郵送されてきた。送り主は”地中海病院、健康部”とあり、親展の赤い文字が印刷されていた。

「健康部か……」

受け取る側への配慮と解釈したらいいのだろうか。『精子バンク』という言葉はご法度のようだ。何だか疾しい^{やま}ことをしているような気がする。A4版の封書を手にした時、大地の頭に”世間体”という言葉と”秘密”という言葉が同時に浮かんだ。なるほど、世の中はこんな風にして動いているのだと。

そう言えば、妻帯者が妻に黙ってドナー登録者になることが多いらしいことも松江から聞いていた。日本人がだんだンドライになってきた証拠なのだろうか。妻帯者がドナーになる場合、配偶者の承認を得ることが義務化されているとは言え、自己申告であるし、病院側だつてより多くのドナーがほしいはずだから、あまり厳しいことは言いたくないのではないだろうか。そこは暗黙の了解に違いない。

個人情報を入力するだけでも大変な作業だった。特に厄介だったのは、家族の健康状態についての項目だった。大地自身の健康についてさえ、子供の頃のこととなるとあやふやになる。大地は幼い頃、左腕に軽い火傷を負った。今でも小さな癍痕が残っている。それが何歳の頃だったのか、よくわからないのだ。火傷なんか遺伝するはずはないのだから、こんなことまで記入するのは無意味だと思いたがらも、”虚偽の記述もしくは隠蔽が明らかになった場合には云々……”という脅し文句を無視するわけにはいかなかった。自分のことでさえこの有様である。ましてや父母や祖父母のことになるとさっぱり自信がなかった。母方の祖母は今年92歳か93歳になるは

ずだ。長寿家系ということで、これはドナーとして有利になるのだろうか。祖父は確か胃癌で亡くなったはずだが没年齢まではつきりしない。父母についても似たり寄ったりだった。正月に帰省した際、父親の血圧が高いようなことを聞いた。しかし薬を使用しているのかどうかは知らない。大地が中学生の頃、母親が一週間ほど入院したのを記憶しているが、一体何で入院していたのだろう。こうして血縁者情報の欄を眺めていると、大地は余りにも自分の身内のことについて知らないので、自分がどんなに冷たい人間であるかを示されているような気になった。

もう一つ煩わしかったのが、大学在学中の成績証明書だった。総務部人事課に行って出してもらえばいいだけの話なのだが、申請書類にその理由を書かなければならない。正直に”精子バンク登録のため”と書くのはいくら物事に無頓着な大地でもバツの悪さを感じた。あれこれ考えて”企業提出用”と書いた。これはウソではない。人事課職員は、理由など見もせず機械的に帳簿に記入し、3日後以降に来てくれ、とニコニコしながら言った。悩んだ時間が馬鹿みたいだった。

たくさんある『精子バンク』の中で、地中海病院はドナー希望者がふるい落とされる可能性が高い施設であることを聞かされていた。一次審査、すなわち書類審査の段階で半分以上が蹴られるらしい。いやらしいやり方だと思う一方で、全く男の闘争心に火をつけてくれる、小憎らしい病院だよと、商業主義に載せられている自分自身に苦笑いしている大地がそこにいた。

結局、なんだかんだで書類を仕上げるのに一週間ほどかった。血縁者書類の情報源はほとんどが母親の記憶である。

病院側はこれらの情報の真偽をどこまで確認するのだろう。自己申告がそのまま通るのなら、何だかいい加減な気がするし、かと言

って、生命保険会社に確認を取ったり医療機関の受診記録まで限なく調べ上げられるのかと思うと、それはそれでぞっとする。

実際、書類作成中、大地は何度も自分の企てをやめようと思った。特に”性”に関する記入欄にはウンザリした。大地はそのページに空欄をいくつか作った。

”これまでの性交渉相手の人数”の項目は、選択肢の一番最後が”100人以上”になっていた。その他、ドサクサにまぎれて、興味半分で質問しているのではないだろうか、と疑いたくなるようなものが複数あった。多分、聞く意味あつてのことなんだろうが、大地には馬鹿馬鹿しく思えて仕方がない。どうしても書く必要があるのなら、送り返されてくるだろう。このページに空白があることで蹴られるのならそれまでだ。

だが、書類不備で送り返されることもなく、二週間後、大地は”合格通知”を受け取った。

地中海病院からの二通目の封書は薄いものだった。堅苦しいあいさつ文の後に、

”厳正なる審査の結果、貴殿がドナーとしてふさわしい資質を備えておられると判断されました。つきましては……”と続いていた。おかしいもので、こんな封書一通で浮き足立ってくる。たかが、『精子バンク』ドナーの、それも一次審査の結果ごときで。男としてのプライドをくすぐられたのだろう。

二次審査は少し面倒だった。費用は全額病院持ちなので心配はないが、人間ドッグに入るため、丸一日予定を空けなければならぬ。手帳を広げて、大地はしばらく考えたのち、三週間後の木曜日に丸印をつけた。

病院側は抜け目がなかった。二次審査を受ける前に提出する契約書があつたのだ。健康状態に問題があつてドナー登録できない場合でも、費用は病院側が持つ。当たり前だ。しかし、二次審査で合格

したにも関わらず、ドナー登録を辞退する場合には、しつかりドッグの費用を請求します、という内容だった。びっくりするような金額だった。タダでドッグだけ受けるようなせこい真似はさせない、ということなのだろう。

久しぶりに丸一日休みを取った。学会発表用のスライドも根を詰めてかなりの所まで作った。実験も都合の良いところまで昨日終わらせた。金曜日に予定している講義の資料も三日前には仕上がっている。マイペースでできる仕事が大半とは言え、丸一日空けるのは大変だった。

木曜日、大地は朝食を抜いて地中海病院へ向かった。受付へ行つて、送られてきた受診カードを出すと、院内パンフレットとプラスチックカードおよび今日のスケジュール表が渡された。順番に検査を受けてくれというのだ。そこで検査手順について簡単な説明を受けた後、まずは地図に沿って二階採血室へ行く。検査の順番がよく考えられたものだ。大地が気づいたのは、もっと後になってからである。採血室では五本もの色とりどりの採血管に血液を取られた。そんなに何を検査するのだろうか。

採血検査のあと、すぐに、精子検査がある。精子検査室は同じく二階にあった。

検査室受付で専用容器を受け取ると、個室を案内された。「出してくれ」という意味である。何とも極まりが悪い。ドアを開けると自動的に部屋のスイッチが入り薄暗い明かりが灯った。と同時に大型スクリーンにビデオが回り始めた。スクリーンの前には皮製のリクライニングシートが設置されていて、そこには清潔な使い捨てシートがかけてあった。それなりに工夫が施されているのだろうが、多くの男が、こんな風に専用容器を前にして、ここで同じ行為をし

ているのかと想像すると、なかなかうまくいかない。特に大地にとって、室内の作りや隠れて見えないビデオデッキなど、どうでもいいことに気が行ってしまう。少なくとも音響設備はすばらしかった。バスをかけたなら聞き応えがあるだろう。スピーカーもいい物だろうが部屋全体の作りが音楽を聴くのに最高の環境を提供している。折角の個室がこんなことのために使われるのが可哀想な気がした。

大体、背広を着てきたことが間違いだっただ。しかし、天下の地中海病院である。あまり変な格好で来るわけにも行かなかった。大地の持つ服は、普段着か背広、そのどちらかしかないのだから、結局、背広で来る以外に方法はなかったのだ。何とも情けない格好の自分に苦笑しながら、大地は出すべきものを出した。検査室へ繋がっているのだろう、壁には二十センチ四方の小さな扉がついていて、そこを開けると小さなスペースがあり、その向こう側にも扉が見えた。その”ドアつきトンネル”の中には背の低い保温器が設置されていた。出したばかりの暖かい体液が入った容器を保温器の中に入れドアを閉めると、微かに壁の向こうから楽しげな音楽が鳴るのが聞こえた。検体が出たことを検査技師に知らせる合図の一つだろう。恐らく視覚的にも確認できるシステム、例えばランプが点るとかそういう二重三重のシステムがとられているだろうと大地は想像した。

やるべきことをやり終えて、大地はズボンを穿いた。そのまま出て行こうとして、ドア近くにあるパネルに気がついた大地は、室内の明かりを強くし、シーツや床を汚していないかを確認した。流しで手を洗い、鏡で服装を確認してから外へ出た。

扉を開けた途端、女性職員と目が合ってしまった、大地は思わず顔をそらした。あちらは慣れたものである。全く動揺する様子もない。トイレの清掃員が、いちいち、客の用足しの場面を想像することがないのと同じなのだろう。実に事務的である。

「お疲れ様でした。番号をお呼びするまで、向かいの休憩室でお過ごしくださいませ。ドッグが控えておりますので、申し訳ありません

んが、今回は、備え付けの飲食コーナーはご利用いただけませんので」

職員は大地にそう言った。

休憩室はありがたいがその中に飲食コーナーがあるのは空腹の大地には少々迷惑だった。

ドアを開けると、中は小規模のラウンジになっていた。新聞、雑誌が数多く置いてある。雑誌の種類は、先ほどの部屋にあったのは全く別の種類である。インターネット接続のパネルも三台あった。休憩室内には、大地以外に三名の男性がいた。二人はソファに腰掛けている。一人は新聞を広げ、もう一人は腕組みをし目を閉じたままじっとしていた。そして、残りのもう一人は飲食コーナーの前に立って、左手にカップを持ち、右手に持ったコーヒースerverを傾けているところだった。

大地はここで十五分程度過ごした。雑誌コーナーで見つけた美しいアルプスの写真集をゆっくり眺めながら。

ピンポンと音がなって、電光掲示板に大地のプラスチックカードに記された番号が点った。これから採血結果と精子検査結果の説明があるのだ。

第7話 ドナー申請（後書き）

次回は、少し間が開きますが、4月27日（月）に更新予定です。

第8話 検査

これまで大地はそれなりの試験を受けてきた。それらは、大地の努力がそのまま反映される形のもので、大抵その努力が報いられる結果を受け取ってきた。ところが、こればかりは、努力も何もない。頑張りようがないのだから、もしも不合格だったとしても、それは仕方がないことだ。

診察室風の個室に呼ばれ、大地は検査結果について説明を受けた。説明をしたのは医師ではなく、コーディネーターと言われる職種の人だった。看護師の資格を持っているらしい。血液検査は、感染症、肝機能、腎機能、貧血、膠原病などについて調べられるそうだ。あとは、遺伝子レベルで遺伝病の可能性について複数個の検査があるという。今日説明されるのは、感染症についての検査結果だけだった。要は、何か一つでも感染症があればドナーにはなれない、すなわち、他の検査も行われないということなのだ。商品にならない精子の持ち主などには用は無いわけだ。

感染症だけでも沢山の項目があった。B型肝炎、C型肝炎やHIV、梅毒など、大地でも知っている感染症のほか、初めて見る感染症もいろいろあった。一覧表には”陰性”の文字が並んでいる。大地はほっとした。半年後、再度、感染症の検査を受けることになっている。ウィンドウ期というのがあって、感染初期は、検査結果が”陰性”になるためだそうだ。それまで、ドナーの精子は冷凍保存されることになる。今日の検査がすべて合格になった上で、さらに半年後の感染症検査ですべてが”陰性”となつて、初めて、商品となるわけだ。

精子について、数と奇形率、そして運動能についての説明があった。数は1ml当たり9000個。奇形率も低く、運動にも問題ないことが説明された。とりあえず、合格だ。精子検査でそれぞれが基準値に達していなければ不合格となり、このあと予定の検査はも

う受けられない。感染症検査と精子検査、この二つはドナー登録において最も基本的な検査である。最初にこれらの検査をして、商品になるかどうかを選別する、そうして無駄な検査をなるべく除外する、そういう地中海病院の方針を大地は理解した。

運良く、次のステップを踏むことができるということを大地はコーディーネーターから知らされた。空腹状態でここまで来た甲斐があったというものだ。

エコー検査、PET検査、消化器画像検査をつけた。空腹状態で多くの検査。エコー検査で心臓の動きを見てもらっている途中、お腹がぐうとなって、検査技師が一瞬微笑んだ。

一通り検査が済んだ。そのいずれも異常と言える異常がないという結果だった。

コーディーネーターから検査結果についての説明を受け、手渡されたのは食事券だった。感染症検査や精子検査で不合格になった場合、この食事券をもらうことができるのだろうか、大地は質問してみた。衝動にかられた。しかし、その二つの検査だけなら昼までかからない。答えは”ノー”だと確信して、質問を飲み込んだ。

最上階にあるレストラン。美しい風景と美味しい料理を大地は心から堪能した。何より、今日の検査結果がすべて大地の期待に沿うものだったことがより一層食事を美味しくした。

数日したら、今日の検査結果が冊子になって郵送されてくるはずである。

”地中海病院 健康部”から、封書が届いたのは、大地がドッグを受けてから六日後だった。病院で簡単に説明のあった検査結果も含めて詳しくまとめられていた。内視鏡やエコー検査結果は、すべ

て美しいカラー写真つきだった。当日知ることのできなかった結果もあった。採血検査では、白血球が通常の人よりやや高いことだけが唯一正常範囲から外れていた。遺伝子診断についても、重篤な遺伝病を発症する遺伝子はないとの結果だった。半年後、再度来院してくれと書かれてあった。二週間の猶予が与えられていて、その間に行かなければ、ドッグ料金の請求書が送られてくるらしい。こういうところは、実にしっかりしている。

人間ドッグが終わって、大地は以前と同じ生活に戻った。ただ一つ、想像することが増えた。それは楽しみと言えば楽しみだった。感染症の検査はパスするはずだ。感染初期のウィンドウ期を見分けるための検査。それが陰性であることは大地自身が一番よく知っている。半年経てば、大地の精子は商品として登録されるはずである。不妊症に悩むカップルが自分の精子をカタログで選んでくれて子供が生まれる。自分のDNAを持った子だ。一体どんな人たちが選んでくれて、どんな子供が生まれるのだろう。それは、大地がどんなに想像しようと努力してみてもさっぱりうまくいかなかった。しかし、近い将来自分の分身がこの世に生を受けるかもしれない、というのは、それだけで楽しい空想であることには違いなかった。またある時は、本当に自分の精子を選んでくれる人がいるか、ふっと不安になることもあった。

そんな折、ある週刊誌に有名人が精子バンクを使って妊娠したというスクープ記事が掲載され、それが火種となって、テレビでも盛んに報道された。精子バンクと無縁な時期の大地だったら、眼もくれなかっただろう。渦中の人はお笑いタレントの未婚女性だった。

バンクを利用するのが、必ずしも不妊症カップルとは限らない。大地にとって、それは衝撃的だった。テレビも週刊誌も有名人の私生活を暴露することに何の躊躇もない。手柄の一つでも取ったかのような下品なメディアの性質を大地は好まなかった。しかし、この

報道は、メディアが目的としていたこととは全く別の視点から、大地にとって看過しがたい内容だった。

教養もあり経済的にも裕福で、ただ一つ、不妊という項目を除いて、すべての面で恵まれたカップルを勝手に想像していた大地にとって、未婚女性が精子を買う、というのは予想外のニュースだったのだ。その報道がきっかけで大地は精子バンクの利用状況に関心を持ち始めた。自分の精子の行方が心配になってきたからだった。場合によっては、人間ドッグ代を支払ってでも、精子提供を取り下げることも考えた。けれども、バンク利用を中止した場合、自分のDNAを残すという手段そのものを考えなおすことになる。大地は途方に暮れた。

考えてみれば、自分だって、本来とは違う目的で精子バンクを利用しているのだ。未婚女性が精子バンクを使って自分の子供を持つことを考えないはずがなかった。自分の考えが足りなかったことを今更ながら感じる大地だった。

半年後、大地は地中海病院へ感染症の再検査を受けに出向いた。

当然、すべての感染症検査で”陰性”の結果を得た。その場で、登録証が渡された。

登録証の裏側には、いくつかの注意点が記載されていた。登録申請を出す際にも注意書きがあったのだが、一人のドナーの精子が使われるのは、出生数が五名までと規定されている。将来的に遺伝子の偏りが生じるのを防ぐためだと言う。登録者がどんなに希望しても、五人目の妊娠が確認された段階でその登録者の精子は一旦 S O L D O U T になって様子を見ることになる。大地は多いにその規定に賛成だったが、この約束がどこまで守られるのか怪しいものだと思った。精子バンクは今やあちこちにある。申請書に嘘の記載をして、数多くの子孫を残すことは可能だろう。大地には五名でも多い数だった。むやみやたらに多くのDNAを残すことを大地自身は希望しないが、世の中、実に色々な考えの人間がいることくら

いは知っている。また、「選ばれる」ということが男たちの自尊心をくすぐることも。『精子バンク』の存在が自然の摂理を崩す可能性があることを大地は危惧せずにいられたかった。特に個人の欲望が暴走するのは大義名分を与えられた時だ。『精子バンク』にはそれがある。不妊症に悩む人たちを救う、という大義名分である。しかし、自分自身も偉そうなことは言えない。大地は一人苦笑した。

大地はその足で、産婦人科へ寄ってみようと思った。産婦人科の受付には一体どんな人たちが待っているのか、見てみたかったのだ。自分の精子を利用する相手が直接見られるのならそんなラッキーなことはないだろうが、それは最初から諦めている。しかし、せめてそこを出入りする人たちがどんな身なりをしてどんな感じの人たちなのか、全体像だけでもいいから知りたかった。あの報道が大地をこんな気持ちにさせているのは間違いなかった。

今の大地には直接産婦人科センターの不妊外来に行く以外に、利用者の様子を知る手立てはない。ドナー検査では、すべての検査が検査室で行われた。一般の目には、普通の人間ドッグを受ける人と全く区別がつかない。それはドナー側からすれば有難い制度だったが、勝手なもので自分は相手を知りたいのだ。大地でさえそうなのだから、実際に高いお金を出して精子を買う側の人間は、ドナーに知られずにその人物を知りたいのではないだろうか、大地はそんなことを一人想像した。

大地は、まるで連れ合いを探しているような素振りをしながら産婦人科外来へやってきた。不妊外来には男性の姿があった。それを見て、大地は、男が来ても不思議でないのだと妙に安心した。番号を呼ばれて一人の女性が立ち上がった。大きな荷物を持っている。受付で受付嬢と少し話をしたあと、彼女はドアをあけて中へ入っていった。その様子を見届けたあと、大地はソファの上にピンク色の封筒が置き去りにされているのに気がついた。あの女性が忘れたに

違いなかった。大地はあわててその封筒を手に取り、受付に持っていった。受付嬢に声をかけたが彼女は書類整理のようなことをしていた。そしてその顔を挙げ大地を見ると、途端に不信そうな目を向けた。受診予定でもない人間がここにいるのは不自然かもしれない。大地は、ピンクの封筒を持った手を上げて、（家内の落し物を取りに来ました）といった風を装い、ニツコリ笑って会釈した。受付嬢は、大地の意図したことを実に正確に汲み取ってくれ、（ああ……）という表情を作って笑った。彼の中に、まずい、という気持ちと同時に、落とし主と話をしてみたい、という衝動的な思いが沸き起こったのは事実であった。でなければ大地がこんな大胆な行動を起こすことはなかっただろう。

第8話 検査（後書き）

次回は5月1日（金）に更新予定です。

第9話 喫茶店『樹々』

次の週、日曜日の十一時に彼がマリアのオフィスまでやってきた。二時から講演会に出席する予定になっているので、あまりゆつくりはできない。

車で行くのかと思っていたら、彼は地下鉄で、と言う。車は持っていないらしい。カーキ色のＴシャツの上に、ブルーとグリーンの細いストライプ柄の綿シャツを羽織っている。下はありきたりのチノパンツ、靴はスニーカーである。マリアと会うために特別オシャレをしてきた、という感じは一切しない。一言で言えば、ダサイ。マリアがこれまで付き合ったことのある男性とは全然違う。彼らは皆、それなりにオシャレだった。

コーヒー店は、マリアのオフィスから時間にして二十分の所にあった。地下鉄で四つ先。二つある出口のうち二番出口から出て、歩いて五分のところにあった。こんな近くにありながら、ほとんど降りたことのない駅。

商業地区というよりは住宅街になる。新しいマンションと古い家々が混在する街。二車線の道路脇には街路樹が植えられており、その奥に可愛い店が並んでいる。洒落たブティックや携帯電話店、インド料理店にサンドイッチ専門店。住み心地の良さそうな綺麗な街だ。

歩きながら、不意に大地がマリアに話しかけてきた。

「マリアというのは『精子バンク』を利用するのに最もふさわしい名前ですね」

カチンと来ることを言ってくれる。マリアは聞こえないふりをした。落し物として届けられた封筒に名前が書いてあったので覚えていたのだろう。しかもマリアという名は印象に残りやすい。しかし、

そんな失礼な事を普通言うだろうか。

「聖母マリアは男なしで受胎した」

大地はお構いなしに続ける。

「だから……？」

マリアは棘のある言い方で返事をした。

「いえ、それだけのこと。気分を害したのならごめんなさい」

この人は、相手を気遣うということをしていない人なのだろうか。精子バンクを利用しているのか？ という質問にしろ、今回の発言にしろ、普通なら躊躇するであろう事をいとも簡単に言っただけ、平気で人を不愉快にする特殊な才能の持ち主らしい。

マリアが付き合ったどの男性とも違う種類の生き物であることは確かだった。彼女の知る男性は皆優しかった。最初だけは。

気まずい空気が流れ、二人は黙ったまま肩を並べて歩いた。

大通りから細い通りへ入ったところで、目指すコーヒー店が近くにあることをマリアは鼻で感じた。香ばしいコーヒーの香りが道路沿いに漂っている。

黙って歩いていた大地がマリアの方に顔を向けて笑った。

「あそこです。あのレンガ造りの建物」

笑うと、なかなかの好青年である。もう少し自分を飾ったらいいのに。女性とあまり付き合ったことがないのだろうか。人の気を惹くことを考えない人物、失礼な物言いで相手の機嫌を損ねることは今までもあったに違いない。損する性格だとマリアは感じた。

P 有りウラ、という小さな看板が見える。赤レンガの建物はこじんまりしていた。『樹々』という文字が、渋色の木製プレートに掘り込まれている。

大地がドアを開けると、今まで微かに漂っていたコーヒーの香りが一気にマリアの全身を包み込んだ。

「いい香り……」

思わずマリアはつぶやいた。大地が後ろのマリアを振り返って、

さりげなく手で合図をする。お先にどうぞ。ぶっきらぼうな人かと思ったら、こんな気が効いた所もあるのだ。

室内は落ち着いた雰囲気で、静かなオーボエの音楽が流れていた。奥まった場所まで進んで、大地はマリアに席を勧めた。二人は向かい合って座る。傍目には、二人がどんな風に映っているのだろうとマリアはふと思った。

長い髪を後ろで結わえた細身の女性が水の入ったグラスを持ってやってきた。年にしたら五十歳前後だろうか。綺麗な人だ。

「いらっしやいませ」

大地は頻繁にここへ来るのだろう。女性の笑顔が『顔見知り』に対するそれであることにマリアは気がついた。

「コナ、二つ下さい」

大地はメニューを見もせずに女性に言った。

「はい、わかりました。ごゆっくりどうぞ」

女性は、眉をほんの少し上げて、ニッコリ笑って言った。マリアは、その女性が、常連のお客さんが彼女を連れてきた、とも思っているのだろうと感じた。そう思われることに、マリアは微妙な心地悪さを感じる。

「学会でハワイに行ったことがあるんです。その時、初めてコナコーヒーを飲んでね。それからですよ、コーヒーに病みつきになっちゃって。この店を見つけた時は、嬉しくて嬉しくて」

カウンターの奥に、口ひげをたくわえたマスターが見えた。優しい目をした人だ。音楽に混じって、豆を砕く音が聞こえてきた。マリアは、落ち着く場所だと思った。少なくとも、いい場所を教えてもらった。本当の恋人と、こんな所で本物のコーヒーを楽しみたいものだ。でも、そんな夢はとっくの昔に諦めている。

大地は、饒舌になっていた。コーヒーの話や、初めてこのお店に入った時のことなどを嬉しそうに話す。マスターは謎めいた人で、医師か科学者か、どちらかだろうと言った。この前には田舎で『

森』という喫茶店を一人で開いていたらしいことも。マリアには、どうでもいい話だった。

「岡島さん、結婚されてないでしょ？」

コーヒーやこのマスターの話をしているかと思っただけ、突然、大地がマリアに話をふった。

マリアは、腹が立った。この男の脳みそには、失礼な言葉ばかりが並んでいるのだろう。

「それが、何か？」

「いえ。ボクは、『精子バンク』を誤解してたんです。ドナーになる前は、不妊症のカップルが精子を買うものだ、そう、信じていたんですよ。ところが、そうじゃなかった。ドナー登録が済んでからですよ。今、未婚の女性の間で『精子バンク』を利用するのが流行っているって知ったのは」

この男がマリアをコーヒーに誘ったのは、いや、わざわざ落し物を届けた真の目的は何なのだろうか。『精子バンク』を未婚のマリアが利用する事を非難するためか？ マリア自身、『精子バンク』利用の動機が不純なのではないか、そんな一抹の後ろめたさがあったからこそ、今までずるずると行動を先延ばしにしてきたというのに、この男は、いちいち人の一番気に触る所にナイフを突き立ててくる。

いやな男なのに、なぜマリアが彼からのコーヒーの誘いに応じたのか、それはマリア自身にもよく分からなかった。単に『精子提供者』である彼への興味からだったのかもしれないし、表情や彼の動作から悪気を感じなかった所為かもしれない。

再び二人の間に微妙な空気が漂いだした時、口ひげマスターが二人の前に現れた。

大地と、それからマリアの前に、左手で丁寧に珈琲カップを置いた。

「いらっしやいませ。先生は本当にコナが好きですね。ごゆっくり

りどうぞ」

大地に向かってマスターは笑って言ったあと、マリアの方を向いて微笑みながら軽く会釈をした。大地はいつもコナを頼むのだろう。琥珀色の液体がゆったりとマリアの前で揺れている。

マリアは、その香りと味をゆっくり堪能した。言葉は何もいらない。こんな美味しい珈琲を飲んだのは初めてだった。大地が島田コーヒーを評価しなかったことが頷ける。『なるほど』とマリアは心から思った。こんな美味しいコーヒーを知ってしまったら島田コーヒーはダメだろう。ここで、焙煎豆を購入できるだろうか、マリアは大地そっちのけで、自分の考えに没頭していた。カップに口をつけたまま、そっとカウンターの方を見る。販売用の豆があるかな、と思いながら。

するといきなり、大地がマリアの顔をまっすぐに見て言った。

「よかったら、僕の精子を使ってくれませんか？」

マリアは、口に含んでいるコーヒーを噴き出した。それは、大地の綿シャツに見事な模様を描いた。マリアの中で驚きと戸惑いと腹立たしさ、そして、コーヒーを噴いてしまったことの申し訳なさが一緒くたになった。大地のシャツについたコーヒーをぬぐおうとテーブル上に立てられた紙ナプキンを手にとったマリアだったが、それよりも、口にわずかに残っていたコーヒーが鼻に抜けて今度は激しく咳き込んだ。持っていたナプキンで口と鼻をふさぎ、マリアは咳が収まるのを待つしかなかった。

第9話 喫茶店『樹々』（後書き）

次話は、5月7日（木）に更新予定です。

第10話 混乱

「良かったら、ボクの精子を使ってくれませんか？」

突然の大地からの申し出にマリアは驚いた。どう解釈したらいいのだろうか。オレにやらせろ、という意味なのか？ お前の欲しいのは『精子』なんだろう？ だったら、オレにやらせれば、地中海病院に不必要なお金を払う必要もないし、結果的には同じことだろう？ そう言いたいのだろうか。腹は立つが、確かにそれは一理ある。精子がほしただけなら、やっちゃえば簡単なのだ。

マリアには、大地の言葉にどう反応すればいいのか、さっぱり判断がつかずにいた。

それにしても、この男は、本当に地中海病院の『精子バンク』のドナーなのだろうか。今までの話が全て本当である、という保障はどこにもない。マリアが単に騙されている可能性だって考えられるのだ。最初からソレが目的で。

この男とベッドに入る……ムリだ。

マリアは激しく思考を巡らせていた。

そんな彼女の心の内を何も知らずに、大地は黙ったまま綿シャツのポケットに右手を入れた。ポケットのあたりにはコーヒーのシミがついている。取り出したのは名刺とボールペンだった。紙ナプキンでテーブルを一拭きしたあと、名刺を裏返して、大地はボールペンを走らせた。

「これがボクのドナー登録番号です。無理に、とは言いません。その……、気が向いたらで結構ですから」

マリアは呆けたように差し出された名刺を見つめた。

頭の中をかき回されるだけかき回されて、固まったまま一言も発することができない。そして、そんなマリアを目の前にして、大地はその沈黙に耐えられなかった。コップの水を一口飲んで、大地は言った。

「今日はどうも、すみませんでした。どうぞ、ゆっくりして行ってください。ボクは、あの……、あの……、これで失礼しますのです」
テーブルの上に丸めて立てられた勘定書を取り上げて、大地は立ち上がった。

マリアが顔を上げると、大地は耳まで真っ赤になっている。頭を下げて立ち去った大地の後姿を見ながら、マリアの頭は一層混乱していた。

二時から参加した講演会は、マリアが前々から楽しみにしていた内容なのに、全然頭に入らなかった。テーブルに出しているメモ帳は真っ白なままだ。

何だかおかしい事になってきた。『精子バンク』のドナーが、自分の精子を使ってくれと申し出てくる。彼は一体、何を考えて、あいう行動に出たのだろうか。

女性に対して何らかのトラウマがあって、行為そのものができないのだろうか。それとも、性器に奇形でもあって見られるのがいやなのか。バンクの精子が売ればドナーに何がしかの支払いが行くだろうから、早く売ってしまいたいためのセールスか？ いや、それはないだろう。報酬と言ったって大した額ではないはずだ。少額のお金を目的に取る行動だったとしたら、喜劇としか言い様がないしかも、マリアが彼の精子を使うかどうかは彼自身にはわからないわけで、IQが高い人間が取る行動では絶対でない。

考えれば考えるほどマリアには大地という人間がわからなくなってくる。往々にして、頭のいい人間の取る行動というのは、凡人には理解できないものなのかも知れない。「やらせる」と言われたら、それはそれで困る。けれど、バンクで彼の精子を買う、というのは、遠回しに「君とやりたくはないけれど」と言われているみたいで何

だか屈辱的な気がしなくてもない。それも、自分の方がお金を払って、である。何だかモヤモヤした気持ちを持って余した状態で講演は終盤を迎えた。

結局何も講演内容が頭に入らないまま、マリアは会場を後にすることになった。

マンションに戻ってマリアは午前中にコーヒー店で受け取った大地の名刺を取り出してみた。クリーム色の名刺。優秀大学工学部物質化学工学科助手、菅野大地。あとは、大学の住所と電話番号、ファックス番号、研究室のホームページアドレスとメールアドレスが載っていた。裏返して見ると、大地の文字があつた。01903 B2665 大地の精子バンク登録ナンバーである。右肩上がりの力強い文字だった。

彼女は、本棚からパンフレットを取り出した。名刺とパンフレットを持ってソファに座る。三冊ともに一番最後に共通の索引がある。番号からドナーの関連ページを探すことができる。

才能重視型パンフレット23ページ。上から順に指でなぞっていく。

あつた。マリアは赤鉛筆で、01903 B2655に赤丸をつけた。大学はSグループ、工学部卒、身長175cm、体重63kg、67〜68kgくらいかと思つたが、男性の体重なんてよくわからないから、そんなものか。

ページをめくって大学別の表を見える。S、A、J、K、C……とあつて、それぞれのグループに大学名が列挙されている。A、B、C……と順番に並べると、偏差値ごとのグループと露骨になるので適当なアルファベットでカムフラージュしているつもりなのだろうか。あまり意味はなさそうだが。表を見てみると、大地の所属する優秀大は確かにSグループの中にあつた。値段。45万円。これはかなり高い値段である。

相手を知っているのに、わざわざパンフレットからその男の精子を購入する……。マリアはパンフレットをテーブルの上に置くと、両手を頭の後ろに組んで天井を見上げた。目を閉じて、もう一度大地の台詞を思い出してみる。「良かったら、ボクの精子を使ってくれませんか？」

本当におかしな事になってきた。一体全体、こんな変なドナーがいるだろうか。

そして、自分の心は、というと……。これがまた、わからないのである。彼に対して嫌悪感を抱いているわけではない。例えば、結婚したい相手か、と言われたら、それは違うかなと思う。大地のこともよくわからない人間だが、自分自身の気持ちもさっぱりわからない。しかし、結婚相手を探しているわけではないのだ。マリアの目的は、精子を手に入れて子供を産むこと。割り切って考えれば、ドナー本人を知っているというのは、悪くないかも知れない。いや、かえってややこしいことになるだろうか……。精子選びで悩んでいた彼女は、今度は、“大地”か、それとも“大地以外のドナー”の精子か、そこから悩みなおすことになった。

地中海病院で手に入れた三名のプロフィールを取り出す。まずは、それらに目を通すことにした。本人による自己紹介から始まっている。自分の長所、短所、趣味、クセなど。あとは、健康診断の結果、血族についての情報、その他。

一人目。数学者でありながら、趣味が料理という人。長所はクヨクヨしない性格が自慢で、運動は苦手。長身でやや細身。近視があつてコンタクトレンズを着用している。父親は国家公務員、母親が物理学者。女性で物理学者というのは珍しい。幼少の頃をヨーロッパで過ごしていたらしい。

二人目。歴史研究者。発掘調査であちこち行っているらしく、旅

行と写真は仕事の延長で大好きらしい。ワイン通、そしてバイオリンは賞を取ったこともある腕前、と趣味の範囲は広い。好き嫌いはつきりしているのが時に災いするという。父方の祖父が肝臓ガンで亡くなっているのは、お酒好きの家系なのだろうか。

三人目。獣医。特に鳥類が専門。アウトドア派。大学時代はボート部に所属。テニス、ゴルフも得意。他の趣味は釣りと囲碁。短所は音痴とある。自宅にはふくろうを飼育中。性格は陽気な方と書いてある。

三名のプロフィールを見るうち、どの人でもいいような気がしてきた。

この三名と菅野大地。四名のうちから一人を選ぶ。いや、正確に言つと、大地か他の三名か。そして他の三名にするなら、誰にするか、である。

もう一度会ってみよう。会って話をしてみてもう一度目で彼を見てみよう。第一、彼がどういうつもりで自分の精子を使ってくれと言ったのか、その心がわからない。わからないものをそのままにしておくのは落ち着かない、というのもあった。彼を候補から外すことはいったってできるのだ。マリアは大地の名刺を取り出し、メールアドレスを確認した。

第10話 混乱（後書き）

次回は、5月14日（木）に更新予定です。

第11話 連絡

菅野大地さま

今日は美味しいコーヒーごちそうさまでした。

そこまで書いて、マリアの両手はキーボードの上で止まった。どう続けたらいいのだろう。もう一度会って話したい、と書いたら誤解されそう。単刀直入に、「ボクの精子を使ってくれませんか」というのはどういう意味ですか？と聞いてみようか。いや、それも何だか変だ。その通りの意味です、とでも言われるのがオチだろう。第一、『精子』という単語を打ち込むのはよほど神経が太くなければできない。かと言って、アレとかソレといった言葉は誤解の元だし、おまけに、かえっていやらしい響きがする。

ああ、もう。マリアは髪をくしゃくしゃと掻いて時計を見た。五時。予約のクライアントが来る時間だ。彼女は一旦メールを閉じた。

もしかしたら大地の方から再び何らかのコンタクトがあるのではないか。マリアは予感していた。自分の精子を使ってくれ、と言いつつ出すぎらないのだから。連絡先は一切教えていないが、彼はマリアのオフィスを知っている。直接来ることも出来るし電話番号ぐらい調べようと思えば簡単だろう。

あるいは、思い切って大地を候補から外して三名の中から選んでしまおうか。色々なことを考えた。そして、結局、数日待ってみることにした。しばらく様子をみて答えを出すのだ。

マリアの予想に反して、一週間経っても大地からは何の音沙汰も

なかった。不思議なもので、連絡がないと気になってくる。三名のプロフィールを見て一人に絞ろうと思ったが、頭のどこかに大地のことがひっかかっていた。

優秀大学に行ってみようか？ マリアは首を振って笑った。何のために？ どうかしている。

散々迷った挙句、彼女はメールを打った。

この前は、美味しいコーヒーをありがとうございました。もう少しお話をしたいのですが如何でしょうか？ 結論はまだ出していません。迷っています。岡島マリア

書いたり消したりしながら、結局これだけを送った。念のため、いつでも捨てられるメールボックスを使用して。

メールを出すと、また、落ち着かなかった。メールという代物は、一度ボタンを押すと、もう取り戻すことができない。便利な反面、厄介でもある。出さなければ良かっただろうか。変な風に勘違いされないだろうか。ちゃんと返事が来るだろうか。もしも、彼がストーカーなんかになっちゃったらどうしよう。

考えても仕方がないと分かっていながら、大地がどういう対応をしてくるのか、マリアは不安だった。

昼すぎにメールを出してから、返事が来たのは夜の十一時を回ってからだった。

メールありがとうございます。私は明後日までは身動きが取れない状態です。その後でしたら大丈夫です。日曜日は、いくらでもスケジュール調整ができます。菅野大地

実にあっさりした返事だった。肩透かしを食らった気分だ。正直言って、もう少し喜んでくれてもいいのに、と思った。こういう返

事をもらうと、精子を使ってくれ、と言った大地の真意がますますわからなくなってくる。大地からのコンタクトを待っていた時には、マリアの気を引くためにわざと連絡も取らずにいるのかもしれないとも考えていたのだが、こんな事務的な返事をもらうと、どうも本当に連絡を取るつもりがなかったような気がしてくる。

既婚者？　もしかしたら既婚者なのかも知れない。最初彼がマリアのオフィスに来たときの第一印象から、マリアは大地を独身者と判断していた。そして、それを疑ったこともなかった。しかし、既婚者が精子バンクのドナーになることもあるのだ。配偶者に黙ってドナーになることだってないとは言えないだろう。でも、日曜日はいくらでもスケジュール調整ができる……。家族持ちが自由に日曜日を使えるだろうか……。単身赴任中だとか……。

考え出すとキリが無い。大地が既婚者である、という仮定はマリアにとつて、あまり気分のいいものではなかった。単純にカタログから精子をオーダーするのなら、こんな気持ちにはならなかっただろう。第一、ドナーの私生活についてなど、気にしたことなかった。

少なくとも、大地が既婚者であるかどうか、そして、もし既婚者なら奥さんがどこまで承知なのか、確かめる必要があると思った。もしも既婚者であったなら、彼の精子を使うことは止めた方がいいのかも知れない。

結局、日曜日の11時に『樹々』で待ち合わせることになった。

日曜日、『樹々』。

マリアより先に大地はそこにいた。ドアを開けて中に入ると、「いらっしやいませ」

長髪の女性が小さく頭を下げた。そして、マリアに近づくと「先

生、来られてますよ」と囁いて、目玉で奥の席を教えてくれた。彼女のエプロンには「諸岡美樹」という名札があった。

「どうもありがとうございます」

お礼を言いながら、マリアは完全に誤解されていると感じて、心の中でため息をついた。大地は果たして、この前と同じ席に座って、ノートに何やら書き込んでいる。電卓までテーブルの上にある。

マリアがテーブルに近づくと、大地は顔を上げてそれらをまとめ、隣の椅子の上に移した。

彼の上半身はほとんどこの前と同じ格好だった。違うのは、Ｔシャツの色がカーキ色ではなく、紺色であることだけだ。縞々の綿シヤツは多分この前と同じものだ。思わずポケットに目が行く。マリアがつけたコーヒーのシミは消えていた。

テーブルの端に寄せられたカップの中のコーヒーはわずかになっている。やはりコナだろうか。かなり長時間ここにいたのだろう。

彼は、待ち合わせの時間よりずっと早くここへ来て仕事をしていた、とそういうわけだ。

「あ、ど、どうぞ」

「お仕事ですか？」

「実験のデータ整理が間に合わなくて。いや、集中するのにいい場所なんです。お店は迷惑かも知れませんが」

大地はここでコーヒーを飲みながら仕事をするのが少なくないのだろう。だから、マスターは、大地のことを「先生」と呼んだのだ。大地が優秀大学工学部で助手をしていることも、恐らく知っているに違いない。そんなことを一人考えながら、マリアは頭を下げてこの前と同じ席に座った。

マリアは、メニューを一通り見て、やっぱりコナコーヒーを頼んだ。何となく、そのことを少し後悔したのは、美樹さんがオーダーを聞いてニツコリ笑った時だった。マリアが過敏になっているだけかも知れないのだが。

「この前は、どうも失礼しました」

大地が言う。確かに前回彼から失礼な言葉は沢山もらった。しかし、何のことを謝っているのか、それは不明だ。もしかしたら「精子を使ってくれ」発言を撤回するつもりなのだろうか。マリアは反応のしようがなかった。

「自分のことを何も話さないまま、帰ってしまいました。自分でもびっくりしたのですが、あんなことをお願いして、恥ずかしくて仕方なくて……。でも、あれじゃあ、さっぱりわからないですよ」

そういうことか。大地は十分な説明をしないままマリアを置き去りにして帰ったことを詫びているのである。マリアはちよつとほつとしていた。これで、彼からの『お願い』発言を撤回されたら、その言葉に振り回されたこの十日間を返せ、と言いたいところだった。「岡島さんに迷惑をかけるつもりは毛頭ありません。もしかしたら、ボクが申し出たことがすでに迷惑になっているかも知れませんが、先日お話したように、ボクは『精子バンク』は、不妊症のカップルが利用するものだと思います。さらに言えば、『不妊症』という一点を除いて、すべての面で恵まれたカップルを想像していたんです」

マリアには大地の言わんとすることが理解できなかった。

「ボクは自分のDNAを託す相手として、そういうカップルを勝手に思い描いていたのです」

「質問してもいい？」

「ええ」

「あなた、結婚していないの？」

「独身です。これから先も結婚するつもりはありません」

「どうしてって訊いても、余計なお世話ですよ。わかりました。

独身のあなたが、自分のDNAを残す手段として『精子バンク』を思いついたのですね」

「そうです」

「で、どうして私に……」

大地がわざわざ独身のマリアに精子提供を申し出た理由。マリアの一番知りたいことだった。

「たまたまです」

「たまたま……？」

「偶然、地中海病院で岡島さんの書類を拾って、あなたがどんな人なのか確認できた。こんなことは、もうないでしょう。残念ながら、岡島さんはボクの理想としていたバンク利用者ではなかった」

正直な人なのだろう。「不妊症カップル」を思い描いていたのだから確かに独身のマリアは大地からすれば理想的ではないはずだ。しかし、否定されるというのは、いい気持ちができるものではない。

「理想的な利用者ではない私に申し出た……」

多少皮肉を込めてマリアは言った。

「まあ、そういうことです。利用者が確認できるというのは、それだけで安心でした。相手がまるでわからないよりいいかな、と。おかしいでしょうか」

複雑な心境のマリアだった。認められているのか認められていないのか、どちらかというところ『仕方なく』というニュアンスが強い。ただ、この人が少なくとも今後ストーカーになる可能性はないだろう。安心する気持ちが半分と腹立たしい気持ちが半分で。

いずれにせよ、ドナーが自分の精子の行方をそれ程まで案じているというのは意外だった。そういう人はドナーにはならないだろうと思っていたからだ。逆の立場からなら理解できる。どんな人の精子なのか、それは利用者からすればとても気になるところだ。

そこまで精子の行方が気になるのであれば結婚すればいいのに。こんな煩わしい手を使ってまで独身にこだわる理由は何だろう。女性に比べれば結婚によって男性が失う物は少ないはずだ。気にはなかったがマリアは大地にそれ以上プライベートな質問をしようとは思わなかった。

第11話 連絡（後書き）

次回は、5月21日（木）に更新予定です。

第12話 大地との会話

「結婚したくない症候群」

大地がポツリと言った。マリアは一瞬、自分のことを言われているのかと錯覚した。

「怖いんですよ。自分の生活をかき乱されるのが」

顔を上げて大地の目を見た。沈黙が流れる。

そんな空気を和らげるかのようなタイミングで美樹さんがやってきた。マリアの前にコーヒーを丁寧^{ていねい}に置く。

「ごゆっくりどうぞ」

「本日のブレンドをもらえませんか？」

大地は追加のコーヒーをオーダーした。

「社交的でない性格なんですよ。女性と付き合うだけでも大変なのに、一緒に生活するなんてボクには考えられない。基本的に女性との付き合いは苦手です」

「あなたが社交的でないというのは少し違う気がする」

「どうして？」

「だって、実際に私のオフィスまで私を訪ね、コーヒーに誘った。それに、今もこうして自分のことをしっかり喋っている」

「……そう言われればそうかも知れない。けれど、かつてこんな事はしたことはありません」

「自分の弱い所も、ほとんど初対面の私に対してさらけ出しているし……、むしろそんなことができる人は珍しいと思う。あなたが女性^{おんな}が苦手、というのは、何と言うか……少し違うような気がする。あなたが今までそう思い込んでいただけ」

大地は、口をへ^{おもむく}の字にして少し考えてから徐に喋りだした。

「多分、岡島さんに対してこんな風に自分の心の中まで話せるのは、……言葉が適当じゃないかも知れないけれど、恋愛を意識しなくて済む相手だからかも知れません」

恋愛を意識しなくて済む相手？　どういう意味だ？

私だって、お宅と恋愛するつもりは全くないが、それをお宅から面と向かって言われたら傷つくというものだ。マリアは大地の無神経な言葉に腹を立てていた。

「一つだけ忠告しておきます。あなたは確かに女性受けしないかもね。あなたの言葉にはいちいち棘がある」

「ははは。そうですか？　では我々は、似た者同士ですね」

大地はまるでマリアの抗議を意に介さない様子だった。

「似た者同士？」

「そう。少なくとも我々は、同じ種類の欠点を持っています。異性との付き合いが面倒だということですよ」

「面倒？　随分失礼ね。あなたはそうかも知れないけど、どうして私がそうだと言い切れるワケ？」

「異性との付き合いがスムーズに行く人間が精子バンクを利用するでしょうか？」

マリアは何も言えなかった。図星だからだ。

「ボクも同じです。ボクだって精子バンクを利用して生物としてやっておく義務だけは果たしておこうと企てた」

「生物としてやっておく義務……。そんな大層なものかしら」

「生物は自分のDNAを残すためには何だってやりますよ。それは本能だ。それをしないうちは落ちつかない。そうじゃありません？　かつては、たとえ不幸になることを予感していたとしても、必死で結婚相手を探したんですよ、男も女もね。結婚はね、怖い物見たさの好奇心でやるんですよ、みんな。ボクはイヤだ」

「人を好きになることは……ないの？」

「ありますよ。男ですから」

「だったら……」

「人を好きになることと結婚は次元が違うでしょう」

「そうかしら。恋愛の延長線上に結婚があると思うけど。勿論、そうでない場合もあるでしょうけど」

「随分純粹なんですね。心理学を勉強した人はもう少し冷めると思っていましたけど」

「失礼ね」

気がつくと、美樹さんが、トレイにコーヒーを載せて横に立っている。

「おまたせしました。先生、そちらのカップ下げましょうか」

嬉しそうに微笑みながら、空になったカップを下げた。カップルが仲の良い喧嘩をしている、とても勘違いされたかもしれない。

「性欲は？」

マリアは、こんな単語を使うことに一瞬ためらいを感じたが、美樹さんが立ち去ったのを確認して、勢いで聞いた。

大地は笑いながら答える。

「ありますよ。当たり前です。ところで、性欲解消のために結婚するんですか？ それはまた、随分短絡的な」

マリアの頭に血が上った。この男と話をする、何だか馬鹿にされているような気がする。

「精子を売って、自分のDNAをタダで女性に育てさせる。随分自分勝手なやり方だと思ったことはありませんか？」

「その通りです。こんなうまい話があつていいんだろって、そう思います」

沈黙が二人の間に流れた。

大地に結婚の意志がなく、自分のDNAを残すために精子バンクを利用したのだ、ということがはっきりした。これ以上必要な情報は、もうないのではないか。クライアントの相談に乗っているわけではないのだ。

それにしてもおかしい人だ。本当に自分の精子を使ってほしかったら、もう少し上手に話をすればいいのに。

マリアはカップに残ったコーヒーを飲み干して別れを告げた。

「今日はわざわざお時間を作ってくださいありがとうございます」

「いえ。こちらこそ。どうもありがとうございました。駅まで送ります」

マリアは一人で帰るつもりでいたが、大地が大急ぎでノート類をトートバッグに入れて立ち上がっている。

『樹々』を出てから、二人は肩を並べて歩いた。

「これから、また仕事ですか？」

マリアは大地のトートバッグを見ながら聞いた。

「そうですね。まあ、仕事のような、仕事でないような。実験で使うのに丁度よさそうなゴムホースやら細々したものを調達しにホームセンターまで行ってみようかと思っています」

この人は、研究のことしか頭にないのだろう。マリアは大地の言葉聞きながらそう思った。

「岡島さん、心理学って面白いですか？」

「え？ 難しい質問ですね。面白いけど難しい、というのが一番近いかな。教科書どおりに行かないことの方が多いし。実力不足も痛感するし」

「人間相手の仕事って、疲れそうですね。僕には無理だなあ。正直言って、”心理学”という学問自体が、何というか、胡散臭いというか、岡島さんには申し訳ないけど、少なくとも、学問体系が僕には合わないと感じるんですね」

マリアは大地の言葉に怒る気にもなれなかった。彼の言葉に慣れてきたのか。いや、正直言って、大地の言うことも、全面的にはではないにしても、理解できるのだ。仕事をしていて、1足す1が2にならないもどかしさはどうにもならない。そして、少なくとも”心理学”が嫌いな人種が存在することは、これまでも感じてきたことだった。大地は、その人種に属していてもちつとも不思議でないタイプである。そういう人たちに、”心理学”を理解してもらおうと思うことが不毛だということも、マリアは知っていた。それに、他の学問と比較しようつたって、マリアは”心理学”以外の学問を詳

しく知らないのだ。だから議論のしようがない。

「誤解されると困るんですけど、”心理学”がボクに合わないと言っているだけで、何も学問そのものを否定したわけじゃないですよ。時々ボクの言葉が足りなくて誤解されてしまうんですけど」

マリアが黙り込んだので気を回したのだろう。大地が付け加えた。『胡散臭い』という言葉を使ったのはどのどいつだ、心の中で反論したが、大地が彼なりにマリアに気を使っているという事実が、少しだけ嬉しかった。彼が不器用なりにマリアに気を回したのは、今回が初めてではないだろうか。

地下鉄の入口まで来た。

「楽しかったです。どうも、ありがとうございます。……あの、一人で出産、育児をされるのは大変でしょうけど、どうぞ、頑張ってください」

マリアは、ひきつり笑いをしながら返事をした。

「ど、どうもありがとう。じゃあ」

横を通り過ぎたサラリーマン風の男性が、ちらとマリアの顔を見た。一人で出産、育児って、人通りのある所でアンタ……。

マリアと大地は、こうして地下鉄入口で別れた。

マリアは大地との会話に”半歩のズレ”みたいな物を感じていた。次の一步を出そうとすると、半歩ずれて、歩行が不安定になるような。でも、彼の言葉が、計算や魂胆にまみれた物でないこともマリアは同時に感じていた。……おかしい人。マリアは小さくつぶやいて、地下鉄券売機の前に立った。

第12話 大地との会話（後書き）

毎回、沢山の方に読んで頂き、大変嬉しく思っています。

そんな皆様方に申し訳ないのですが、都合により1週間だけお休みします。

文章を書く時間が足りなくなりました。ストーリーは出来上がっていますので、未完成で終わることはありません。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

次回は、6月4日（木）に更新予定です。

第13話 妊娠

マリアは妊娠した。それは二度目の試みで成功したのだ。地中海病院産婦人科で、精子注入という一番シンプルな方法を使って。

はじめて妊娠の事実を告げられた時、実感がなかった。もちろんマリアは嬉しかった。嬉しかったからこそ、妊娠の宣告があっさりしすぎて物足りなかったのかもしれない。もっとドラマティックな展開を想像していた。

マンションに戻って、具体的に今後のことを考えた。仕事の調整、母親にどう説明するか……。そうしてようやく自分の生活がこれから変わっていくを感じていた。

母親のことは、さして心配していなかった。” 幸せな結婚生活を送ること” がいかに困難であるかを身に試みて知っている人である。彼女の願いは唯一つ、どんな形であれ、マリアが幸福な毎日を送る、ただそれだけだった。あの人は、私が未婚の母になることを聞いても驚かないのではないか、とマリアは思った。もしかしたら、すでにそういうことを予感しているかも知れない。

問題は『精子バンク』についてどう説明するか、もしくはそのことについて、あえて触れないでおくか、である。

どちらでもいい、とマリアは思った。大した問題じゃない。話の流れで喋るかも知れないし、喋らないかも知れない。

もう一つ、マリアは大地に妊娠の事実を伝えるかどうかで悩んだ。彼は、マリアが彼の精子を使ったことさえ知らない。

あれつきり連絡は途絶えたままだ。マリアの方から連絡を取らなければ、恐らく二人が会話を交わす機会はもう来ないだろう。

大地には誰かと結婚するという意志がないことは明白だった。マリアに接近したのもマリアと直接親しくなるのが目的ではなかった。しかし、現実問題として、大地は、マリアのお腹に宿っている胎児

の遺伝学上の父親である。あれだけ精子の行方を心配していたのだから、やはり連絡を入れておくべきだろう。マリアはぐだぐだとメールを打つ言い訳を考えて、ようやく結論に辿りついた。

菅野大地さま

あなたのを使わせて頂きました。本日、産婦人科を受診し妊娠していると告げられました。岡島マリア

夜中に返事が来た。

わざわざメールありがとうございます。それに使ってくれてどうもありがとうございます。少し照れくさいですね。生きていく楽しみが一つできました。妊娠中に気をつけるべきことを分かりやすくまとめた資料がありましたのでPDFにして添付しておきます。菅

野大地

マリアは耐えた。すぐにでももう一度メールで返事をしたかったが、ブレーキをかけられなくなるのが怖かったのだ。妊娠の知らせをメールした本当の理由、マリアはそれに気づいていた。

彼女は孤独だった。嬉しいはずの妊娠。実際には喜びと孤独とが同居していた。それが不安から来ることも彼女は感じていた。

自分は畑教授のように強い人間だろうか。これから大きく変わる自分の生活にきちんと対応していけるだろうか。これからの長い10ヶ月、そして、出産、育児……。本当に一人でやっていけるのか、大きな不安が突き上げてきた。

マリアは誰かに頼りたい心細さを持て余していた。「誰か」は、母親でも友人でもない。本来なら一緒に胎児の成長を見守ってゆくはずの人間である。

さらに、マリアを心細くさせていたのが悪阻つわりであった。妊娠成立

で喜んだのも束の間、悪阻が始まった。明らかにお腹は空いているのにマリアの嗅覚が食事を拒絶していた。ドラマでは、妊娠した女性が突然吐き気を催すシーンがよく出てくる。台詞なしで妊娠を視聴者に伝える古典的な手法だが、マリアの悪阻は時々なんてものではなくて、四六時中続いた。仕事も負担になっている。

マンションのローンがあと4ヶ月残っている。十分な頭金を準備して購入し、3回の繰上げ返済のお陰で、あと少しで終わるという所まで来た。もっと早く終わらせるつもりだったが、精子バンクを使うことを具体的に考えた時から、すべてを貯金に回してきたのだ。実際、地中海病院への支払額はかなりの高額になり、貯金していて正解だったと思う。それでも、あと4ヶ月は、頑張って仕事をこなす必要があるのだ。

麺類ならいけるかも、と素麺を湯がくと、湯がいている最中から食べる気が失せてくる。それでも無理して三分の一程食べるが、これから数日は素麺は無理だな、と思う。これでメニューの候補が一つ減った。一人ぼっちは悪阻を酷くするようだ。

体調が悪いことがより一層マリアの不安をかきたてた。マリアはどうしていいのかわからなかった。本来なら喜ばなくてはならない状態なのに、一時的なものだとわかっていのに、体調の悪さが気分まで沈ませてしまうことを身をもって感じていた。これが不治の病なんかだったら、きつと気が狂う。体調と精神が密接に関係していることを初めて知らされたような気がしていた。本を読んで”理解する”ことと、”経験する”ことの何と大きな隔たりだろう。

マリアは携帯を握り締め、しばらくの間、じっと見つめた。

開いては閉じる。何度かそういうことを繰り返した。大地に妊娠の知らせをしてから一週間、マリアは同じ動作を繰り返してきた。

とうとう、心細さに負けた。メールを打つ。

つわりが強く、何を食べたらいいいのかわかりません。困りまし

た。岡島マリア

三十分後に返事が届いた。

経験が無いので、上手にアドバイスできないのですが、何か一緒に食べに行きましようか？ お寿司、サンドイッチ、うどん、カレー、牛丼、ハンバーグ、エビピラフ、フランクフルト、ソフトクリーム、お好み焼き、ナシゴレン、グラタン、パスタ……

どれか、食べられそうなものがありますか？ 五時半に岡島さんの職場に迎えに行きます。行く気が無かったら、玄関先で断つてくれて結構です。もしご自宅におられて気乗りしないのなら、そのまま私のことは放っておいてください。私はどっちみち食事に出かけますので。菅野大地

マリアは文面を見て、微笑んだ。変わった人だな、ホントに。これまで付き合ったことのある男性達とまるで反対側にいる。今までマリアが見向きもしなかったタイプの男性。最初優しくて、次第にマリアを支配しようとする男性ばかり見てきたマリアにとって、大地は不思議な存在だった。大地にとって、マリアは恋愛対象ではない。だからなのだろうか。本当に恋愛感情を持った相手だったら、やはり大地のような人間でも、相手を支配しようとするものなのだろうか。大地にとってのマリアは、……たぶん、友達の一人なのだろう。

友達か……。大地の優しさは、マリアにとっても同性のそれと区別がつかない種類のものだ。今は、彼の友情に甘えることにしよう。とにかく、この気持ちの悪さは何ともならない。誰かと一緒に食事に行けば、もしかしたら、少しでも入るかもしれない。

五時半。大地がやってきた。カーキ色のＴシャツに、水色の綿シヤツ。チノパンツはこの前と一緒に。この人の『基本形』なのだろう。

マリアは思わず笑った。

二人はファミリーストランに出かけた。何なら食べられるのが良くわからないまま、とりあえず選択肢の多いファミレスに、ということになったのだ。

メニューを見て、マリアはため息をついた。それでも大地と一緒にいることで昨日より吐き気が少ない気がした。

かわいいエプロンをつけた係員にマリアはオーダーした。

「生姜焼き定食お願いします」

係員がテーブルを離れてから大地は笑いながら言った。

「面白いものですね。食べられない、と言うと、普通はお粥か何かかな、と想像するのですが、必ずしもそうではないんですね。生姜焼き定食ですか」

大地は決して厭味で言っているのではなく、疑問に思ったことを素直に表現しているだけなのだということをマリアは知っていた。裏表のない人間なのだろう。

「自分でも不思議。むしろお粥は勘弁してほしいって思う」

マリアは、定食を半分食べることができた。上出来だ。

奇妙な二人の関係が始まった。産婦人科を受診するたびにマリアは大地にメールを送るようになった。受診のたびに胎児が成長しているのを確認することはマリアにとって喜び以外の何物でもない。嬉しくてついメールで連絡してしまう。時にはエコーの画像と一緒に送ることもあった。

大地にとっても定期的に送られてくるマリアからの報告が楽しみになっていった。マリアの産婦人科受診日が来ると、大地はメールが来るまで落ち着かない。送られてきたエコーを拡大してつい見入ってしまう。

大地は、研究の途中、これまでに何度も苦しみや喜びを感じてき

た。突破口が見つかった時、興奮して眠れない夜を送ったこともあった。しかし、今回ののはこれまで感じてきた興奮とは明らかに異質のものである。

マリアの妊娠成立に、大地が関係している、と言えばそうなのだが、今はとくに大地の手を離れ、着々と胎児は育っている。新しい命が、大地の意志や努力といったものからは全く影響を受けない所で、自律的に成長している。そのありきたりの事実には大地は驚愕している。大地の手の届かないところにあることが、もどかしかった。

研究の過程にも、大地の手を離れる瞬間がある。自分の身体よりもっと高い所から、何かの力が作用して、全く新しい所へ大地を導く。しかし、それは本当に瞬間的なもので、ベースに大地自身の集中力や粘りがある。それらが極限まで堆積した所に、ポーンと突き抜ける瞬間。大地の手を離れる一瞬は、間違いなく大地が自分の力で導いたものだ。

しかし、妊娠は全く違う。大地には何一つ関わることができないのだ。女性は自分の身体が変化したり、胎児の成長を直接感じることもできるという点で、男性よりずっと胎児に近い存在である。胎児を守り育んでいるという自覚もあるだろう。それでも育っているのは、胎児自身の力である。これを神秘と呼ばずして何と呼ぶだろう。

メールで報告を受けるたびに、喜びと不安と恐怖が入れ替わり立ち代り大地に訪れてきた。自分のDNAを引き継いだ胎児が無事育っているという喜び。マリアや胎児に何かあったらどうしようかという不安。そして、自分の中に、間違いなく父性が芽生えてきていることに対して戸惑いを感じ始めていた。

第13話 妊娠（後書き）

次回は、6月11日（木）に更新予定です。

第14話 出産

マリアの母親の反応は、マリアの予期していたものとは異なっていた。彼女はマリアの妊娠を喜んでくれなかった。大きなため息が漏れた。

「お前には人並みの結婚生活を送ってもらいたかった。育て方を誤ったんかな」

マリアの目を見ずに喋る母親の小さな声。

「どうしたものかねえ」

誰にともなく独り言のような呟きだった。

手放しで喜んでくれるものとはかり思っていた。『精子バンク』を利用した、なんて間違っても言えない。予想外の母親の落胆振りにマリアは胸を締め付けられた。

「おかあさん、ごめんなさい」

やっと言えたのはこれだけだった。

「お前を責めるわけには行かないんだろうね。私がちゃんとお手本を見せてやれなかったからね。世間の目も昔ほど厳しくないかもしれないけど、結局お前が苦労することには変わらないんだよ」

また一つ、大きなため息をつく。

あれほど父に苦しめられた母なのに、子供には人並みの結婚を望むという母の反応は、驚きだった。確かに女手一つでマリアを育ててきたのは並大抵の苦労ではなかっただろう。それでも、父との縁が切れてからの母は、マリアの前でよく笑うようになった。マリアから見て、明らかに離婚してからの方が生き生きしていた。そんな母親がマリアに与えた影響は決して小さくない。しかし、だからこそ、母は今、娘の告白を聞いて苦しんでいるのだ。恐らく自分を責めているのだろう。

マリアはとうとう『精子バンク』について話せなかった。不思議

なことに、母親はマリアの相手のことについて問い詰めることをしなかった。目の前の事実を受け入れるだけで精一杯だったのか、それとも自分の過去と重ね合わせて聞くことができなかったのか、それはよくわからない。マリアにとっては不幸中の幸いだった。

マリアの体型は母親と会ったたびに妊婦らしくなつてゆく。本当は娘の花嫁姿を期待していたのだろうが、次第に孫の出産を待ちわびる言葉が増えていった。

マリアも、あれほどつらかった悪阻から解放され、今度は体重管理に気を使うようになった。便秘に悩まされるようになって、そのことを母親に相談すると、

「マリアを妊娠していた時もそうだったよ」
懐かしむように言った。

妊娠を機会に母娘は以前より会う頻度が増した。マリアは幸せだった。母親もまた、幸せそうに見えた。初めて聞く母親の苦労話も、今のマリアには何の抵抗もなく受け入れることができた。二人で色々な話をするようになったが、マリアは大地のことは決して口にしなかった。母は、マリアが相手の男性からつらい目に会わされたと思っているみたいで、「お前も男運がないね」とだけ寂しそうな笑みを浮かべて言った。

時おり、大地のことを話してみたくなる衝動にかられることがあった。そのたびに、慌てて自分にブレーキをかける。定期的に大地にメールを送っていることを母は知らない。大地からも必ず返事がある。その文章はいつも事務的だが、必ずマリアと胎児のことを心配している様子が伝わってきた。文章そのものよりも、マリアがメールを打って、すぐに返事が返ってくるという事実が、大地が二人を常に気にかけている何よりの証拠だった。

しかし、二人の関係を説明することは困難を極める。マリア自身でさえ混乱しているのに第三者に上手く伝える自信はあるはずがなかった。大地のお陰で、妊娠してからずっと誰かに見守られている

という幸福感があった。と同時に、切なさもあった。

ドナーと利用者であるという基本姿勢を、大地も、そしてマリアも崩していない。マリアが無事に出産を終えた時点で、二人の関係は終わるような気がしていたし、終わらせるべきだと感じていた。できることなら……と、考えることはある。しかし、大地には結婚の意志がない。そのためにわざわざ『精子バンク』のドナーになっているのだ。

二人の中途半端な関係を終わらせるのは、出産時であろう。無事に自分のDNAを引き継いだ子供が誕生したことを知れば、大地は安心するはずである。

「おめでとうございます。これから一人で育てていくのは大変でしょうが、どうぞ頑張ってください」

そんな大地からのメールをマリアは一人で想像していた。

十ヶ月は瞬く間に過ぎた。

仕事は尻すぼみに減らして行き、臨月に入って完全に休暇状態になった。母親と一緒に産着や哺乳瓶を買いに出かけるのは、マリアにとって楽しいひと時だった。出産シーンを想像すると怖かったが、お腹の中の子供に出会えるのは楽しみでもあった。

予定日を二日過ぎてマリアは女兒を出産した。陣痛は十時間続いたが、出産自体は問題なく済んだ。分娩台の上に仰向けになっているマリアのお腹の上に助産師が赤ん坊を乗せて見せてくれた。元気に泣く我が子の姿を見てマリアの頬に涙がこぼれた。顔は真っ赤になって腫れているが、かわいい赤ん坊だった。誰に似ているのだろう。赤ん坊の元気な姿を見て、出産の痛みは大きな喜びへと変化していた。

マリアの母親も涙を流して喜んだ。

「可愛いなあ。口元はマリアにそっくり。髪の毛、フサフサしてるねえ。栗色のクセツ毛はおとうちゃんの血をついだんかな」

地中海病院の産婦人科は全室個室だった。一番安い部屋をお願いしたが、それでも一般人には豪華な作りだった。出産後、母親がマリアの身の回りの世話をしてくれた。地中海病院にはありとあらゆるサービスが充実していたが、母親が「もったいない」と、最低限の料金で済むように動き回った。

その夜、母親が帰宅した後、マリアはメールを開いた。出産後で多少興奮状態にあったが、それよりも疲れの方が大きかった。

菅野大地さま

本日、11時20分、無事出産しました。元気な女の子です。岡島マリア

それだけを送って病室の明かりを消した。その日、メールの返信は来なかった。

翌日、朝から母親が来た。孫の誕生が嬉しくてたまらない様子である。昨日一日を保育器で過ごしたマリアの赤ちゃんが部屋にやってくるのだ。保育器は母親の子宮内とよく似た環境を作り出しているという。赤ん坊にとっては産道を通り抜けただけでも大きなストレスである。時間をかけて徐々に外界の環境に慣らしてゆくのがこのやり方だと聞いた。

ベビーベッドにはピンクの大きなネーム札が下がっていた。岡島マリアベビー、女兒、6月13日11時20分、O型Rh(+)、49.5cm、3015g。ネーム札の縁にはお花とミツバチの絵が楽しげに踊っている。

出産後のマリアは何やかやと忙しかった。赤ん坊の世話は、半分

は職員がしてくれるが、あとの半分は、助産師や看護師から教育をうけつつ、マリアがこなさなければならぬ。退院してからのことを考えると、やっていけるだろうかと不安になった。

「慣れですよ」と助産師は笑って言うが、母親は軽く一蹴した。

「マリアの覚悟が足りないのよ。しばらくは寝不足が続くでしょう。それが母親の役目だからね」

昼過ぎには、母親はマリアの洗濯物を持って帰って行った。

夕方、電話がなった。

「産科受付、牧野です。カンノダイチ様がお見えになっています。ご面会希望だそうですけどどういたしましょう。お通ししてもよろしいですか？」

マリアはドキリとした。大きく深呼吸をして答える。

「どうぞ。お部屋に来てもらってください」

マリアはカーディガンを羽織り、鏡をのぞいて髪を整えた。2、3分待っただろうか、ドアをノックする音が聞こえた。

「はい。どうぞ」

そろりとドアが開いて大地が顔をのぞかせた。

第14話 出産（後書き）

次回は、6月18日（木）に更新予定です。

第15話 提案

「お久しぶり。元気そうでしょ？ どうぞ」

「おめでとうございます。って言ったらいいのかな。メール、ありがとうございます」

大地は、ゆっくり部屋の中に入ってきた。

「まだ、名前が決まらなくて。悩んでる最中なの。かわいいよ。見てあげて」

マリアは、ベビーベッドの方に顔を向けて大地に促した。6月とはいえ、外は暑そうだ。マリアは、飲み物を出そうと備えつけの冷蔵庫を開けた。

グラスを二つ出して、麦茶を注ぐ。トレイに入れてテーブルまで運ぶと、大地はベビーベッドの前にじっと立っている。

「暑かったでしょ。麦茶しかないけど、どうぞ」

大地の返事はなかった。ベッドの前に腰を曲げた状態で彼はじっとしている。後姿からは、その表情は見えなかった。ゆっくり大地が赤ん坊に右手を伸ばしている。母乳を40分前に飲ませて、赤ん坊はご機嫌。一番いい時間帯に来てくれた。

マリアは、後ろからそっと覗き込んだ。大地の人差し指を赤ん坊がしっかりと握り締めている。足をびよこびよこ動かしながら。次の瞬間、マリアは驚きで声も出なかった。大地の右腕に滴^{しずく}がぽたりと落ちたのだ。それは、ツーツと大地の右腕を少し走っていき、途中で腕の裏側に回った。大地が赤ん坊に指を掴まれたまま、泣いている。こういうことか理解できなかった。ただ、見てはいけけないものを見たような気がしていた。

マリアは大地が振り返るのを待った。おそらく彼は、赤ん坊の顔を確認し、同時にマリアに別れを告げに来たのだろう。それにしても、大地らしくない反応だった。子供の顔を見て喜ぶことは想定し

ていたが、泣くことまでは考えていなかった。マリアもどう対応していいかわからない。

やがて、大地がマリアの方を向いた。涙は流れていなかったが目が赤い。

「岡島さん」

大地がマリアの目をまっすぐに見た。

ギクリとした。これまでの展開からすると、大地が突拍子もないことを言い出す前兆のような気がした。マリアは唾をぐくりと飲み込んだ。

「はい？」

「あの……」

緊張した大地の顔がそこにあった。しばらく逡巡^{しゅんじゅん}した後、大地は言った。

「結婚してくれませんか？」

「え……？ 結婚って……」

マリアは思考停止状態に陥った。突然そんなことを言われても、マリアは大地の思考回路が理解できない。マリアが多少なりとも想像したこのある道筋だったが、大地がそういうことを言い出すことは絶対ないと踏んでいた。かつて、大地は、結婚は怖い物見たさの好奇心からするものだ、と言った。自身の結婚についても完全否定していた。おまけにマリアに対して恋愛感情を持たなくてすむ相手、とまで言ったのだ。それなのに、なぜ、いきなり結婚なのだ？ 「どいう風^{ふう}の吹き回し？ 結婚はしないはずじゃなかったっけ？」 かるうじてマリアは質問した。喉がカラカラになっている。

「いろいろ考えました」

「で、怖い物みたさの好奇心が芽生えた？」

「そういう所です」

ええっ？ 肯定するのか？

「急にそんなことを言われても……」

「ですよ」

気まずい空気が漂う。

「あなたの話にはいつも驚かされる。きちんと説明してくれない？」
「子供には父親がいた方がいいんじゃないかって、そう思います。
それが理由です」

マリアは、大地が結婚を申し出てくれたことがまんざらイヤじゃなかった。だけど、何で大地はいつもこうなのだ。オンナはプライドが高いのだ。そんな風に言われたら素直になれないではないか。

「この子のために？」

「ええ、まあ、それが一つの理由ですけど」

「ですけど？」

「ですけど……。一言で言うのは難しいです」

ああ、じれったい。

「一言で言わなくていい。きちんと話を聞きますから。だって、おかしいでしょ？ 理解できないもの。私、プロポーズされてるのかしら？ そこからわからないもの。あなたが私にプロポーズしているのか、それとも単に『子供のために』って思いつきでそんなことを口走っているのか」

「岡島さんに迷惑はかけたくないんですけど、子供の将来を考えた
ら父親がいた方がいいんじゃないかと」

つまり、プロポーズではなく、一つの提案をしているのだと、そういうことか？ 英語のプロポーズはもともと”提案する”という意味だ。そこから”結婚を申し出る”という新しい意味が派生している。どうでもいいことをマリアは思っていた。同じプロポーズでも、大地のプロポーズは原意の方なのか。

「書面の上だけでもいいと思います。岡島さんが岡島姓にこだわっておられるのならボクの姓を変えてもいい。仕事は今まで通り菅野で続けていきます」

「書面の上だけって……」

その時、すーっと部屋のドアが開いたことに二人は気がつかなか

った。

「お願いします。結婚してください」

大地は深々と頭を下げている。

ガサツと音がした。見ると、母親が買い物袋を床に落として、部屋の入りに立っている。

「お、おかあさん……」

また、何でこんなタイミングで……。

母親は、びつくりした顔で立ったままだ。次の瞬間、母親は、二人の所まで歩み寄ってきた。

目をパチパチしながら、母親は大地を見つめている。

「えっと、母です」

マリアは慌てて大地に母親を紹介してから、今度は母親に向かって言った。

「こちら菅野さん。お祝いに来てくれて……」

「お祝いに来たついでに、プロポーズかい？」

やっぱり、聞いていたのか……。

「この子の父親なの？」

母は、大地に向かって訊いている。

「あ、いや、あの、結婚して頂けたら、父親、ということになります……。あの、岡島さんのお母様ですか。菅野大地と言います。よ、よろしくお願いいたします」

何を訳の分からないことを言っているのだろう。大地は完全に舞い上がっているとマリアは思った。君はこの子の父親ではないか。でも、考えたら確かに微妙なニュアンスだ。この子の父親、と言ってしまったら、マリアとそういう関係だ、と表明することでもあるのだ、普通は。否定してしまう大地の心情を理解できないでもない。母親は大地の言葉を聞いて何か勘違いしたようだ。

「最初から、あなたみたいな真面目な方とお付き合いしていたら、こんなことにはならなかったでしょうに……。マリアも見目がない

くって本当に……。でも、こんな子持ちの女にプロポーズしたら、菅野さんのご両親はきつと反対なさるでしょうから」

と、そこまで大地にベラベラ喋ったあと、何を思ったか

「でもね、マリアは少し変わった子ですけど、根は優しいんですよ。親の私が言うのも変ですけど」

大地にあいそ笑いしている。

「私は、これから用事がありますから失礼しますね。菅野さん、でしたっけ？ どうぞごゆっくりなさってくださいね」

につこり笑って、マリアの母は勝手に部屋から出て行った。

二人の間に沈黙が流れた。

そんなぎこちない空気をかき消すようにマリアが口を開く。

「ごめんなさい。まさか、母がああタイミングで……」

「いえ、ボクの方こそ。何だか岡島さんに迷惑をかけてしまったみたいで」

「ああ、いえ、そんなことは……」

いや、あるかな、とマリアは思った。全く、間が悪い、というのか……。

「返事は急ぎません。ボクは生物としての本能をわかっていなかった」

「本能？ DNAを残すって言うてた、アレ？」

「ええ。生物に組み込まれたのは『DNAを残したい』という欲求だけじゃなかった。何としてでも子供を守りたくなる。そして……」

大地はじつとマリアの目を見たかと思うと、ふっと目をそらして言った。

「子供を守るためには、母親を守る必要がある。そういうことです。生物としての本能だとか、DNAだとか、回りくどい言い方。でも、これが大地なりの精一杯の表現なのだろう。」

マリアは嬉しかった。思い切って大地の胸に抱かれてみようか、

と、そう思った瞬間、赤ん坊が泣き出した。

第15話 提案（後書き）

毎回、読んでくださって、どうもありがとうございます。
次回は、少し早め、6月22日（月）に更新予定です。

第16話 疑惑

子供の名前は、『花^{はな}』にした。大地と関連のあるものをいろいろ考えたが、女の子の名前に反映させるのは意外に難しかった。大地に咲く一輪の花。マリアは、いい名前だと思った。

二人は結婚した。書面の上で。出生届けを出すのと同時に。母親が大地のことを気に入ったことがマリアの背中を押した。具体的なこととは追々考えていけばいい、こういうことは早い方がいいと母は言った。結局、マリアが姓を菅野に変更することになった。仕事は岡島のままで復帰する。一方、大地も、当分今までの生活を続けていく。彼の自由にさせるよう母はマリアに忠告した。

「お前みたいな子を嫁にもらってくれるなんて本当に奇特な人がいたもんだ。世の中捨てたもんじゃないね。神様に感謝しなくちゃ。大地さんのことは大切にしないよ。そうでなきゃバチが当たる」と言ったが、大地が名門大学で研究に勤しんでいることを知ってから、母親は「お前には勿体無い人だ」と口癖のように繰り返した。「彼が、この子の本当の父親だと言ったら、お母さん、びっくりする?」

マリアは、仄めかすように母に訊いた。

「本当の父親じゃないことは、見ればわかるじゃないか。何馬鹿なこと言ってるんだい」

「え? どうして?」

「お前と大地さんが特別^{とくべつ}の関係にないことくらいは親ならわかるさ。それに、赤ん坊が彼に似てないじゃないか」

こんな風に言下に否定されてしまうと、マリアは、精子バンクを利用したことをますます言いづらくなる。母親が大地を過大評価しているような気がした。マリアが大地と特別^{とくべつ}の関係にないことを見抜いたことは流石母親だと思ったが。

大地とマリアは、言わば共犯のようなものだ。『精子バンク』を利用して、結婚せずに子供を作ろうと思ったマリアと、同じく、結婚せずに自分の子供を誰かに育ててもらおうと思った大地。結局、順番が狂っただけで、普通のカップルと同じ道を歩こうとしている。考えてみれば、遠回りをしたものの全てがうまくいっているのかも知れない。大地にとってもマリア自身にとっても、そして子供にとっても。ああ、忘れてた、マリアの母親にとっても。でも、どこかで母親には本当のことを話さなくてはならない。大地の両親は、赤ん坊の父親が大地だと知っている。もちろん、そうでなかったなら、マリアとの結婚に強く反対したはずだ。わざわざ子持ちの女を息子の嫁に選ぶ馬鹿な親はいない。いくら、大地が「一生結婚はしない」と宣言していて、その意志を変更したことを知って喜んだとしても、マリアの母親だけが、この子を他人の子だと信じている。その誤解は解いておかなくてはならない。彼女は一人、大地の両親に対して申し訳ない思いを抱いているのだ。

大地は、結婚式はしなくてもいいけど、マリアの方にその希望があれば、少し落ち着いてからやってもいいと言った。今は赤ん坊の世話が忙しくてそれどころじゃないから、やるとしても、一年過ぎからでいいんじゃないかと言う。マリアの母親は、マリアのウエディング姿を見たがっている。

大地は、ボロアパートとマリアのマンションを行ったり来たりするようになった。大学の研究は相変わらず大変そうだが、花の顔を見に来るのが楽しくて仕方がない様子だった。

「おままごとみたいだ」

花を腕に抱いて大地が言う。

「え？ おままごと？」

「うん。こんな楽しい生活があったなんて。自分で自分が信じられない」

マリアも同じだった。こんな幸せがあっただろうかとしみじみ思う。

「ほんとね。私もそう」

花は大地の腕の中で眠りについていて、花をベッドにゆっくり戻し、振り返って大地が質問した。

「ここへ引越してきても……いいですか？」

マリアは笑った。

「私たち夫婦だよ。近くにいるのに別居してる方がおかしい」

マリアはゆっくり大地の胸に顔をつけて両腕を大地の背中に回した。大地は一瞬戸惑った様子だったが、マリアの髪をなでた後、しっかりと抱きしめた。大地と唇を重ねながら、マリアは、この幸せが壊れませんようにと、心から願った。

「私たち、順番がめっちゃくちゃね」

マリアの言葉に、大地は苦笑いをした。

マリアは、本当に幸福だった。結婚生活はつらく苦しいものだとばかり思っていた。男性は常に女性を支配したがる動物だと思い込んでいた。しかし、実際には、大地のような人間が存在した。それは、マリアにとってほとんど奇跡だった。結婚に幻想を抱いていなかったから、より一層、幸福を感じたのかもしれない。

出会った頃は、恋愛対象でさえなかった大地が、これほど大切な存在になるとは思ってもいなかった。穏やかな幸せが今、マリアを包み込んでいた。

暑中見舞いには、結婚したことで子供が生まれたことを書いた。拳式をしていないマリアにとって、季節のハガキが唯一、友人達に近況を知らせる手段だった。

みんなマリアが結婚したことに驚いていた。結婚はしないとマリ

アは常日頃から言っていたし、友人の間でも、「結婚するとしてもマリアが一番最後だね」というのが一致したみんなの意見だった。

大学時代の友人なつみが、会いたいと言ってきた。マリアはマンションに彼女を呼んだ。仕事に復帰する前に、会える友達には会っておきたかった。性格が全然違う友人だが、学生時代には意外とマリアと気があった。みんなマリアとなつみの組み合わせを不思議がった。

なつみは四年前に結婚したが、一年しか続かなかった。学生時代には結婚に対して、誰よりも積極的だった。学歴とルックスは絶対に外せないと言し、自分自身も、オシャレには相当お金をつぎ込んでいた。それなのに、結婚には失敗したのだ。わからないものだ。

なつみは、マリアを羨ましがった。高学歴の夫に可愛い女の子。

大学じゃなくて、一流企業に就職してもらったら年収も増えてもつといいのに、なんて、言いたい放題だったが、なつみが言うとは厭味にならないのは不思議だった。

「顔はイマイチぱつとしないね。でも、これくらいが一番いいかもよ」

ローテーブルに飾っていた写真立てを手に持って、なつみはやはり勝手なことを言った。でも、その口調はしみじみしたものだった。なつみの離婚原因は、夫の浮気だったからだ。高学歴と見た目の良さ。結局、それが災いしたのかもしれない。夫の女性関係は派手だった。社交的であることは、妻の座に座ってみると、必ずしも利点にならないことがある。なつみは彼女なりに苦しい時期を過ごしてきたのだ。

「わかんないものね、本当に」

なつみの言葉に、マリアも同意した。

そんななつみが、しばらく花を相手に遊んでいると、ふっと気に

なることを言い出した。

「この子、本当に旦那さんの子？ 全然似てないね」

「え？」

マリアは驚いてなつみの顔を凝視した。マリアがあんまり真剣な顔でなつみを見つめたので、逆になつみがうるたえた。

「う、うそよ。ごめんごめん。あんまりマリアが幸せそうだから、私嫉妬しちゃって。ごめん。冗談がすぎたね。写真だけじゃわかんないものね」

マリアは動揺していた。

花が大地に似ていない、というのは、マリアも感じていたからだ。しかし、今まではそのことを何の疑問にも思ってこなかった。なつみの言葉によって初めて浮上してきた疑問。なぜ、この子は大地に似ていないのだろうか？

大慌てでマリアは取り繕った。

「隔世遺伝みたいなの。彼のお父さんに似てるのよね」

自分は何故ウソをついているのだろう。マリアは心の内でそう呟きながら、早く一人になりたいと思っていた。

この子の父親は大地じゃない。

マリアの中に、疑念が芽生えた。大地に似ていない。幾分マリアに似た所はあるが、マリアにそっくりというわけではない。父親の特徴が混じっているのだろうと思うのだが大地との共通点がほとんどないのだ。栗色の髪、強いウェーブ、切れ長の目、指の爪の形、マリアの家系とは明らかに違う。そうなれば、父親の家系からと考えるのが自然だ。眉が大地と似ていなくもない。はっきりした眉だ。それでも、そんな目で見ればかろうじて眉が似ているかな、という程度で、他のどの部位を取っても、大地との共通点が見えない。

この子を産んだ時から、マリアは、大地には似ていないなと思っ

た。しかし、生まれたての赤ん坊は顔が腫れているし、それに出生直後の顔つきなんて刻々と変化していく。無事に出産を終えたという喜びが、小さな疑念をすべて打ち消していた。そして今、記憶の糸を花との初めての対面まで巻き戻してみても、マリアの疑念は大きく膨らんでいった。あの時から今まで、花から大地の遺伝子の片鱗を感じたことが一度もない。

もしも、大地が父親でないとしたら、一体、誰の子だろう。何が起きたのだろう。マリアは掌にじっとり汗をかいた。一つは、医療ミス。地中海病院が検体の取り違えをした可能性である。もう一つは、考えたくないことだが、大地がマリアを騙した可能性。でも、一体何のために？

精子バンクは、どんな仕組みになっているのだろう。他人の精子を自分のものと偽って提出することができるだろうか？ まさか、天下の地中海病院である。他の怪しい施設だったらわからないが、地中海病院に限ってそれはないだろう。恐らく、本人に直接、病院で出してもらうに違いない。とすると、病院側のオーダーミスか？あるいは、菅野大地と名乗って友人が病院に出向く、これなら可能ではないだろうか……。まさかね、推理小説じゃあるまいし。

大地は、この子のことをどんな風に感じているのだろう。自分に似ていると思っているのだろうか。大地の心の中をのぞいてみたい気がするが、直接聞く勇氣はない。それに、もしも本当にこの子の親が大地でないとしたら、大地はどう思うだろうか。もともと子供が可哀想という理由で結婚を申し込んでくれたのだ。とすると、この結婚自体に意味がないことになる。一体、どうしたらいいのだろうか。

第16話 疑惑（後書き）

次回は、6月26日（金）に更新予定です。

第17話 プロフィール

プロフィール……。大地のプロフィールをマリアは購入しなかった。三万円が惜しかったわけではない。いや、多少は惜しい気もあったが、それは大した理由ではなかった。あえて言葉にするなら大地を”商品”として見たくなかったのかもしれない。あるいは、実際に大地に会い、直感と洞察力で決心した自分自身の行動を否定したくなかったと言ってもいい。職業上、クライアントの人物像を把握する訓練を積んで来たマリアにとって、自分自身を信じることは彼女のプライドを守ることに他ならなかった。紙の上に書き込まれた情報に惑わされなくなかったのだ。

マリアは地中海病院で行ったアドバイザーとのやり取りを思い出していた。

「プロフィールなしで決定されるのですか？ 本当にそれでいいんですか？」

アドバイザーの前にあるコンピュータには、マリアが購入したプロフィールナンバーの履歴が残っていたはずだ。三名のプロフィール。勿論、その中に大地のものはない。アドバイザーが不審に思うのも無理はなかった。

少々順番がおかしくなるが大地のプロフィールを出してもらおう。そこに書かれている内容が大地のものとして矛盾しないならば、マリアが大地の精子を購入した後、地中海病院側が検体取り違えをした可能性がある。あるいは、本当に花が大地の子で、未だに大地の遺伝情報が何一つ見える形で現れていないだけなのか。マリアが神経質になりすぎているだけで。

しかし、もしも、そのプロフィールが大地のものとして矛盾する内容だったら……。一体、どう考えたらいいのだろう。

マリアは大きくため息をついた。考えたくはなかったが、推理する必要性は感じていた。一つは、大地が記憶違いをしていた可能性。マリアは、大地が『樹々』で名刺の裏にスラスラと自分の登録ナンバーを書いていた情景を思い出した。あの時の番号が間違っていた……。

そして、一番考えたくない可能性……。大地が故意に嘘をついている可能性……。何のために？ 誰かから頼まれた？ いや、そんなこと、ありえない。

すべてが不明である今、推理の上に推理を重ねるのは良くない。まずは、彼のプロフィールを確認することが先決だと思った。

地中海病院産婦人科不妊外来相談窓口でマリアは大地のプロフィールを出してもらった。仕事の打ち合わせがあると母親には言いわけをし、半日、花の世話をお願いした。

「すみません。今さらなんですけど、やはり、プロフィールを出して頂けませんか？」

特別に出してもらった。特別に、というのは、明らかに本来の使用目的を逸脱するプロフィール販売はできないためである。精子を購入する意志のない人にプロフィールを出さないのが原則なのだそう。今回は、マリア自身が使用した精子なので、問題ないだろうと言われた。

「他の方のは出せませんので」と付け加えられた。

No. 01903B2655のプロフィールを受け取って、マリアは自宅に戻った。受け取った瞬間、その場で開けてみようかと思っただが、結局怖くてできなかった。

自宅のソファに腰かけ、封筒からプロフィールを取り出す。

30歳、175cm、63kg、B型Rh(+)、Sグループ大

学工学部情報工学科。現在、医学分野への応用に取り組んでおり、二年前には開発したプログラムで学会賞を取った。趣味は仕事と重なるが、コンピュータのソフト開発。学生時より多数のゲームソフトを開発しており、いくつかは商品化され、そのうちの一つは大ヒットした。他の趣味は、卓球、あとはヘブライ語を勉強中。顔はちよつと自信あり。髪は栗色、少し天然パーマが入っている。大学二年の頃から近視が強くなり、めがねを使用中。父親は大学の数学教授。母親は……

大地ではない。マリアは血の気が引いていくのを感じていた。一縷の望みを抱いていたが、花の父親は大地ではない。このプロフィールの持ち主こそが父親である。では、大地は一体何者なのか？

正直言つて、どうせ大地の子でないのなら、地中海病院の検体取り違いであつてほしいと願つていた。病院側の間違いならば、少なくとも大地を疑わなくて済むからだ。考えなくなつたが、大地を疑わずにいかなかった。彼がウソをついた可能性。ウソの番号をマリアに伝えた理由は？ 大地とドナーの関係は？ そもそも大地は本当にドナー登録しているのだろうか？ 彼がマリアに結婚を申し込んだ真の目的は？

わからない。何もかも。大地を信じてもいいのだろうか？ 彼との結婚に踏み切つたのは早計だつたのではないか？ 数々の疑問。底知れぬ不安。これらの疑問を直接大地にぶつけるべきなのだろうか。

マリアの中に、大地を信じたい、という気持ちと、本当に信じていいのだろうか、という不安が激しくせめぎあつた。私は一体どうすればいいのだ？

大地が不妊症である可能性……。

マリアはハツとした。大地の目的は本当は結婚そのものだったのではないか？ ドナーは同じSグループ大の工学部である。大地と同じ優秀大かも知れない。友人？ 知人？ 大地が何らかの機会にドナーの登録番号を知ってしまったとしたら……。

いや、大地にそういうことができるだろうか？ 不器用な優しさが全て演技だったというのだろうか？

マリアは混乱していた。落ち着かず、部屋の中をうろろろするばかりである。考えたくはないのに、一つの仮説を立てると、その仮説に沿って大地の行動が説明できるか考えずにおれなかった。

独身主義者であったことがウソであるならば、辻褄は合う。例えば、大地は友人と一緒に軽い気持ちで精子バンクにドナー登録しようと思った。ところが精子に問題があつて登録できなかった。それも「無精子症」のようなかなり深刻な状態。彼はしばらく悩んだ。そして、そのことを誰にも言わずに結婚する手段を彼は思いついた。それが、精子バンク利用者の中で、独身女性に目をつけることだった……。たまたま私が不妊外来の受付に忘れ物をしたために、彼は私に狙いを定め近づいてきた。彼が私に執着しなかった理由は、私がダメだったら次のターゲットを探せば済む話だから……。ところが、私は彼に連絡を取った……。

マリアの心は不安定だった。大地のことをどう考えたらいいのか、気持ちが両極端に揺れ動いた。大地は花を自分の子として可愛がってくれている。そして、花の母親としてのマリアにも愛情を注いでくれている。もしも大地が本当に何も知らないとしたら、この信じられない事実気づいた時、どう思うのか、どうするのか、そういう思考に頭が占められて泣きたくなることもあつたし、逆に、大地がはじめからマリアを騙している、という思いに鳥肌が立つこともあつた。花をあやしている時も、オムツを換えている時も、保育園の申し込みに役所に出向いた時も、何をしていても、マリアの心の

中に宿った不安は常にマリアを苦しめた。

そもそも大地は、花をことをどう感じているのだろう。結局、考えはいつもそこに終着した。

自分の子ではないとうすうす気づいてもよさそうなもののに、いつ来ても大地は嬉しそうに花を抱き上げる。どう見ても大地は自分の子として花に接している。微塵の疑いもなく。

本当に全く疑っていないのか、全てを知った上で自分の子として花に接しているのか、どちらかしかあり得ないと思った。

それにしても、自分と似ていない子に対して、全く疑わないということがありうるだろうか？ マリアが大地のことを疑っている以上に、彼はマリアのことを疑って当然なのだ。何しろ、彼が花の父親であることを確信できる手がかりは何もないのだ。「あなたのを使わせて頂きました」というマリアからのメールが全てである。子供が自分に似ているなら信じることもできるだろう。しかし、これだけ似ていないのだ。なつみでさえ冗談交じりに言ったのだ。本当に旦那さんの子？ と。

大地が花と初めて会ったのは、花が生まれた次の日だった。マリアは記憶を呼び戻した。あの日、大地はマリアにプロポーズした。それをマリアの母親が偶然聞いた。そこまで思い出して、マリアは思わず大きく頭を振った。マリアは確信した。大地は知っている、全てを。母親が「この子の父親か？」と大地に問うた時、大地は肯定しなかったではないか。確か、（結婚すれば、父親、ということになります）とか何とか答えたのだ。咄嗟のことでウソがつけなかったのだろう。大変な罠にはまった可能性がある。マリアは恐怖を感じ始めていた。

第17話 プロフィール（後書き）

次回は、7月2日（木）に更新予定です。

第18話 真相

メールの着信音が鳴った。大地からだった。

ピザを買って帰ります。引越しの作業が全然進みません（困った！）。でも、今日はパス。同僚からワインをもらったので、一緒に乾杯しましょう。アルコールは母乳に移行するのかな。花が酔っ払ったら困るから、少しだけね。大地。

マリアは、大地からのメールを何度も読んだ。背景にある大地の心を読み取るうとして。最初読んだ時、正直言って、ゾクツとした。でも、何度か読んでいくうち、マリアは、大地からの暖かいメール1本にさえ疑心暗鬼になってしまっている自分を嫌悪した。素直に喜ぶべきなのに。

結婚前に比べると随分親しみのある文章を書いてくれるようになった。それでも、大地は、妻の心の中に土足で踏み込んでくるようなことはしない。大地に対してマリア自身が疑いの気持ちさえ抱いていなければ、何と心地いい優しさだろう。何も気づかなかった頃に戻れたら……。そうして、ふっとマリアは思った。たとえ、大地に騙されているとしても、今のマリアに何の不都合があるだろうか。このまま何も知らなかったことにするのが一番いい方法なのではないか。大地の心に魂胆があったとしても、それを暴くこと^{あば}が一体何の解決策になるだろう。いつかは知ることになるだろう真実を、マリアは少しでも先送りしたいと思った。折角掴んだ幸せが離れていきそう、マリアはそれが怖かった。

マリアは努めて穏やかな心で時を過ごそうとした。花の肌着類を洗い、花をあやし、母乳を与え、部屋を掃除し、そして大地と一緒に食事をするためにサラダを準備した。ここ3日間、大地は来なか

った。忙しくて大学に詰めていたのだ。前回会った時には、マリアは幸福の真っ只中にいた。ほんの3日しか経っていないのに、ずつとずつと遠い日のような気がしてくる。大地が花の真の父親でないことに気づいたのが昨日。まだマリアはその事実の重さを消化しきれていない。

インターホンが鳴って一階エントランスに立つ大地の顔が映し出された。マリアはカギを解除した。玄関のチャイムが鳴るまで2、3分待たただろうか。ずいぶん長く感じられた。

「おかえり」

マリアは、ドアを開けると微笑みながら大地に言った。マリアは自分の態度がきこちなくなっていないか、少しだけ不安だった。大地はニコニコしている。ピザの箱とワインと、そしてバラの花を手にとって。

「花屋さんが開いていたから、買ってみた」

一輪だけのバラの花をマリアに渡し、大地は靴を脱いで部屋に上ってきた。ピザとワインをテーブルに置くと、真っ先にベビーベッドに向かって行き、花を確認した。

「また、少し顔つきが変わったね。どんどん成長するなあ」

花の無事を確認して安心したのか、洗面台へ向かい手を洗ったかと思うと、大急ぎで再び花の元に戻ってきた。目を細めて大地が花を抱き上げる。まだきこちなさが残るが抱き上げ方だが、それでも随分上手になった。

「花ちゃん、パパですよ」

花は、腕に抱かれて、じっと大地の目を見つめている。

何と平和な図だろう。この場面だけを切り取って見たら、愛情に満ち溢れた幸せな家庭に見えるに違いない。でも、現実には、マリアの中に大地に対しての一握りの警戒心がある。もしかしたら、大地とマリア、二人揃って演技をしているのかもしれない。見せ掛けの愛情。マリアは、そんな思いを振り払うように、無理やり笑顔を作

って、ピザをプレートの上に移した。

大地は食事の席で仕事の話をしない。ピザを頬張りながら話題にしたのは、予防接種の話だった。いろいろと調べたのだろう。マリアの知らなかったことまで披露してくれる。要は、予防接種の有用性と危険性を全て納得した上で受けさせたい、と、そういうことだった。カバンの中から、プリントアウトしたたくさんのA4用紙を取り出してテーブルの上に置いた。任意接種になっている感染症に関する資料とそのワクチンについての資料だった。何とママな人だろう。

「もしかして、血液型、A型？」

マリアは笑いながら聞いた。

2切れ目のピザに伸ばした大地の手が一瞬止まった。

「よくわかったね。そう、A型」

大地の表情が曇った。

「どうしたの？」

マリアは聞いた。鼓動が幾分速くなっている。

「いや……。血液型占いつて当てになるのかなと思って」

苦笑いをして目を逸らした大地の顔を見て、マリアの心に一瞬にして黒い膜が広がった。水の上に墨汁を1滴垂らした時のような、そんな広がり方だった。

二人はしばらく黙ったままだった。唐突にウィンブルドンの決勝戦に話題を変えて、二人は共に空々しく笑い、そしてそのまま夕食を終えた。

テーブルを片付け、マリアはキッチンでワイングラスとプレートを洗った。備え付けの食洗機があるが、大抵は乾燥機としてのみ使っている。汚す食器が少ないためだ。

突然、後ろに気配を感じた。と同時に、マリアの腰に腕が回ってきた。マリアはビクツとした。咄嗟に腰をひねって大地から逃げた。

考える間もなかった。手が濡れていて無意識のうちにシンク上にある両腕を動かさないように下半身だけをずらしていた。

大地の動きが止まった。ちょっと間があって、マリアの頭の後ろから声が漏れた。

「ごめん」

大地の小さな声だった。流しを叩く水の音にかき消されそうな小さななやみが、マリアの心臓に潜入してきた。一瞬感じた恐怖は消え去り、説明のつかない哀しみがマリアの身体をしばりつけていた。

大地はゆっくりとマリアから離れた。ぎこちない空気。こんな空気をマリアは何度大地と共有しただろう。でも、今回ののは今までのと比べてずっと重く悲しかった。

大地は「忘れ物をした」と言って、大学に戻っていった。マリアは引き止めることができなかった。

オムツを替え、母乳を含ませてしばらく抱いているうち、花はスヤスヤと眠った。天使のような寝顔だ。花と過ごす毎日は大変ではあるがマリアにたつぷりと幸せを与えてくれる。この子の父親が大地であつたなら。マリアは考えても仕方のないことを考えてしまう。花をベッドに寝かせ、マリアは本棚から精子バンクのパンフレットを1冊取り出した。ここから始まったのだ。何もかも。大地との出会いも花の誕生も、そして……。楽しいことばかりじゃなかった。つらいこともひとまとめにして、全部一緒にマリアにギフトされた。このパンフレットは早めに処分しよう。花の本当の父親のプロフィールを残しておけば、あとは不要だ。

マリアはぱらぱらとページをみくった。その時、パンフレットからはらりと大地の名刺が落ちた。クリーム色の名刺。マリアはしゃがんでそれを取り上げた。裏にあるのは右肩上がりの力強い大地の文字。01903B2665。

マリアは目を見開いた。次の瞬間、マリアは立ち上がり、パンフレット横に立ててある封筒を手にとった。胸が高鳴っている。震える手で封筒内のプロフィールを取り出す。花の本当の父親の情報が書きこまれている3万円のプロフィール。地中海病院精子バンク登録者No.01903B2655。

ガクガクと膝が震えてきた。今度はパンフレットのページをめくって、自分がつけた赤丸を探した。01903B2655。太く赤い丸印がついている。2655と2665。マリアが大地からもらった名刺に書かれた番号をパンフレットから探し出す時にマリアが間違えたのだ。パンフレットの中に01903B2665の番号はなかった。

第18話 真相（後書き）

次回は、7月9日（木）に更新予定です。

第19話 苦悩 1

大地の名刺とパンフレットがマリアの手から落ちた。マリアの間違った。地中海病院のミスでも大地の仕組んだ罠でもなかった。どうしたらいいのだろう。何も知らない大地。花を自分の子と信じて、花を守るために結婚を申し出てくれた。マリアのことを好きだと明言してくれなかったことに少しばかり腹を立てたりしたけれど、何て身勝手だったんだろう。純粋な気持ちでマリアに結婚を申し込んでくれていたのだ。そんな彼を疑っていたなんて。なんと大きな過ちを犯してしまったんだろう。取り返しのつかない過ち。

大地とのぎこちない会話が次々に思い出された。こんな幸せがかつて存在しただろうか。その幸せがさらさらと指の間から落ちていく気がした。マリアが番号を間違ったりしなければ、その幸せをずっと享受できたのだ。愛しているなんて陳腐な台詞をもらわなくても良かった。暖かく見守ってくれる大地の存在がどれだけ有難かったか。けれど、もうおしまいだ。

大地に何と云えばいいのだろう。離婚は確実だろう。もともと契約のような結婚である。離婚を申し出られるのは仕方が無いと思う。自業自得なのだから。けれど、大地に何と云えばいいのだろう。どれだけ彼を傷つけるだろう。そのことの方が今のマリアには辛かった。このまま黙っておくというわけには……。言わなければならぬ、という気持ちと、幸せを失いたくない、大地を悲しませたくない、という気持ちがマリアの心を激しく行き来した。事実を知った時、大地は何と云うだろうか。何と言って怒るだろうか。しかも、すでにマリアは大地を傷つけてしまっている。大学に戻ったまま帰ってこない。否、大学へは戻っていないかも知れない。自分のアパートで一人過ごしているかもしれないのだ。

大地は血液型がA型だと言った。マリアがO型。花がO型なのは

大地の子として矛盾しない。大地は何も知らないのだ。でも、いつかはばれる。今は何の疑問も抱いていないとしても、いつか必ず不審に思う日が来る。成長すれば成長するだけ、発現していなかった遺伝子が働き出す。そして間違いなく疑いような特徴が現れてくるはずなのだ。その日まで知らない振りを続けていく……、不可能だ。

どうしてあの時、もう一度、番号を確かめなかったのだろう。どうしてプロフィールをもらわなかったのだろう。激しい後悔がマリアを襲う。プロフィールを見ていれば、その時に気がついたはずなのだ。ドナーが大地ではない、ということに。

マリアは床に座り込んだまま途方に暮れていた。

メールの着信を知らせる音楽がなった。大地からだ。

研究会の準備を先に済ませることにしました。今日は戻れません。それから、さつきはすみませんでした。大地

マリアは携帯を握り締めてぼろぼろと涙を流した。謝るのは自分の方なのに。嗚咽で息をするのでさえ苦しかった。近いうちに全てを話して、謝罪して、そして終止符を打とう。苦しいけれど、せめて大地に対して正直でいたい。彼を今解放しなければ、将来、一層つらいことになるだろう。最初の計画通り、『精子バンク』を利用して一人で子供を育てていくという方針に戻るだけだ。マリアは必死で自分に言い聞かせた。

花の世話をするだけでも普段から寝不足気味だが、その日、マリアは別の理由で眠れなかった。とうとう一睡もできないまま白々と夜が明けた。

自分の決心が変わらないうちに、大地には連絡を入れておこう。そう思ったのは、一夜を過ごしてからだった。

大切な話があります。私はあなたに謝らなければなりません。今度来られる時に、ゆっくりお時間を下さい。マリア

これで後戻りできなくなる。そう思うと、送信ボタンを押す指が震えた。しばらく携帯画面を睨み付けて、マリアは目をつぶってボタンを押した。

大地からの返信があつたのは夕方だった。

わかりました。今日、そちらに行きます。7時くらいになると思います。大地

大地は手にクマのぬいぐるみを持っていた。

「これ。花に」

照れ笑いをしながら玄関先で、花を抱いたマリアに差し出す。シヤラシヤラと透明袋が音をたてた。ピンクの大きなリボンがついている。

マリアは、たまらなくなつて泣いた。どうしてこんな時にぬいぐるみなんて買ってくるのよ。これ以上、私を責めないで。謝らなくちゃいけないってメールしたじゃない。空気読んでよ。

マリアがしゃくりあげている前で、大地は彼女が落ち着くのをしばらく待っていたが、とうとう切り出した。

「上つてもいい？」

いつまでも玄関で二人向かい合っていても埒が明かない。マリアは、上腕で頬をぬぐって、ウンウンと頭を縦に振った。

花を抱いたまま、マリアはソファに座った。ソファには十分なスペースがあつたが、大地はソファに座らずにテーブルの椅子に座った。椅子に横向きに座ってソファのマリアと向かい合っている。

「引越し、やめようか？」

大地が口を開いた。

「え？」

「無理、してたんでしょ？　ボクは、今のままでいいから」

マリアの顔は再び涙でぐしゃぐしゃになった。そういうことじゃないのに。大地の優しさがどこまでもマリアを追い込んでいく。

「そう……じゃなくて……、花はね、花は……」

マリアは一気に喋ってしまおうと思つたのに、横隔膜がマリアの意志を無視して定期的に引きつって息を吸い込む。子供が泣いてるみたいだ。うまく喋れない。

その時、大地から思いがけない言葉が飛び出した。

「ボクの子じゃないってこと？　それを言いたかつたの？」

「え？」

マリアはまだ横隔膜の興奮を抑えられない状態で、驚いた様子で大地を見た。しばらく沈黙が続いた。再びマリアは混乱していた。

「知つてたの？」

大地は黙つたまま頷いた。

「いつから？」

「最初に花に会つた時」

「似てないと思つた？」

「そうじゃなくて、ベッド柵にかけてあつた花のプレート」

大地は両肘をテーブルと椅子の背もたれにつき、両手を目の前で組んで、左右の親指をこすり合わせていた。

「ボクの血液型はA型です。でも、A型はA型でも、Oの混じらないA型なんです。父も母もAB型。珍しい組み合わせでしょう。つまり、ボクの子供でO型はありえないんですよ」

あの時……。あの時に大地は知ってしまったのだ。大地が花を見

ながら泣いていたのは、そういうことだったんだ。ようやくマリアは、理解した。

マリアは、大地から受け取った登録番号をパンフレットから探すとき、番号を間違えてしまったことを告げた。

「ごめんなさい。謝っても取り返しがつかないことだと分かっているの。本当に本当に、ごめんなさい。どんなに謝っても許してもらえないんじゃないんだけど」

大地は、まっすぐにマリアの方を見て言った。

「終わってしまったことについては仕方がないですよ。原因について考えるより、今後どうするかの方がずっと大事でしょう」

「でも……。昨日、自分の間違いだと気づいて、ずっと悔やんでる。眠れなくて……」

「もつと前の段階でボクらは間違っていたんじゃないでしょうか。そういう意味で、ボクとあなたは同罪です」

マリアは、大地の言葉の意味を理解できないまま、自分の疑問を投げかけた。

「自分の子供じゃないと知ってて、あえて結婚を申し出てくれたのよね？ どうして？」

「ずっと、迷ってました。花に会うまでは。花の顔を確認したら終わりにすべきだと自分に言い聞かせてもきました。でも、あのプレートを見た時、つまり、花がボクの子ではないと気づいた時、何とか、恐ろしいほど切なくなりました。何か手違いがあったんだろ？ うな、と咄嗟に思いました。ボクは、どうしたらいいんだろ？、目の前にある現実はどう対処していったらいいんだろ？と、途方に暮れました」

マリアは目を真つ赤にしたまま、大地の言う事に耳を傾けていた。「このまま別れたら、本当に何のつながりもなくなるんだと気づいたんです。花ともあなたとも。赤の他人になるんですよ。ずっと、つながっていると信じていたのに。最初から何の関係もなかった、そして、その後も、ずっと。でも、結婚すれば、書面の上だけでも

結婚すれば、繋がってられる。たとえボクのDNAを引き継いでいなくても。胎児の頃から花の成長を見守ってきたという実感を引き継ぐことができるんです。二人に関わり続けたかったんです」

マリアは、心がえぐられる思いだった。何か手違いがあった、大地は、単純にそう思った。何の疑いもマリアに対して持たなかった。自分が大地を疑っていたのとは違うという違いだろう。あの短い時間に大地は結婚へと結論をもっていたのだ。マリアを責めてもおかしくないのにそうしなかった。騙されたと感じてもおかしくないのに、そう思わなかった。それに、あれだけ自分のDNAにこだわっていた大地が、血の繋がっていない花を心から大事にしてくれている。マリアには、こんな人が存在すること自体が信じられなかった。

さらに大地は続けた。

「それからもう一つ。あなたが花を妊娠していた頃、ボクは精子バンクについて色々調べました。本当はこんなことは精子バンクのドナーになる前にやっておくべきことでした。そして、自分がやってきたことに対して疑問が生じてきました」

大地がじつとマリアを見つめた。

第19話 苦悩 1（後書き）

次回は、7月16日（木）に更新予定です。

第20話 苦悩 2

大地は、言葉を続けた。

「『精子バンク』は、色々な思惑の人間の利害が一致して成り立っています。精子を利用する側、提供する側、そして仲介する人間たち。精子を利用する側には色々な事情を持った人たちがいるでしょう。みんなそれぞれ、切実な思いで利用していると思います。提供する側にもいろんな人間がいる。精子を出すだけで金になる。少額ではあっても小遣い稼ぎの感覚で提供する人間は結構いると思います。完全にボランティアにすると精子が思うように集まらないことからそれは伺えます。つまりは、謝礼金は一つの立派な目的なんだと思うんです。一方で、自分のDNAをなるべく沢山残したいと思う人間もいるでしょう。ボクは、少し違うけれども、結婚を回避する方法としてバンクを利用しました。そして、仲介業者。ドナーの感染症検査でさえいい加減な怪しい業者から、地中海病院のようにセレブを相手にしている所もあります。いずれにしても商売として成り立つ仕組みがそこにある。この三者の利害によって成り立っている産業なんですよ」

マリアは口を挟んだ。

「私のようなケースはともかく、本当に不妊で悩んでいるカップルを責めるわけにはいかないと思うんだけど」

「ボクは、いいとか悪いとか、そういう話をしているんじゃないんです。ただ、現実はどうだ、という話をしています。感情論を持ち込むと、全体像が見えにくくなるでしょう。ボクは誰も非難するつもりはないし、第一、ボクに人を非難する資格はありません。話を元に戻しますね。『精子バンク』というのは三者協議によって成立している産業ですよ。本当にこの三者の望みだけで済むなら、すべての人間がハッピーで、めでたしめでたし、です。でも、そこに大きな視点が抜けてると思いませんか？」

マリアは首を捻った。大きな視点？

大地がヒントを出す。

「一番の当事者でありながら協議に参加できない人間」

「あ……」

「物言えぬ存在」

「赤ちゃん……」

マリアは、子供の立場で考えたつもりでいた。大きくなったときに、我が子にどんな風に説明したらいいだろうか、と、そういうことはいつも考えていた。しかし、大地が言おうとしているのは、決してそのレベルではない。マリアはそう感じていた。

「米国で今、何が起きてると思いますか？ あるいは、ヨーロッパで。『精子バンク』を利用して生まれてきた子供たちは、みんな、自分の出自が不明であることに苦しんでいるんです。自分は一体何者なんだろうと。その苦しみは、当事者でないと理解できないものだと思うんです。ある意味非常に高い知能を持った子供達が沢山生まれてきたけれど、実に多くが自分の父親探しのために多大な時間とエネルギーを費やしています。彼らに言わせると、それがはつきりしないうちは、何も手につかないんだそうです。そんな子供たちがインターネットで結びついた。仲間を求めて、共同作業で効率よく父親探しを始めたんです。そして、その中から自力で自分の父親を探し当てた子供たちも出てきました。ところが、いくつかの悲劇が起きています。ある父親は、すでに死亡していた。詳しいことを知りたいと遺族にコンタクトを取ったことで、その家庭が崩壊しました。意図的ではなかった。ただ、自分の父親のことが知りたい、その思いだけだった。しかし、遺族にとっては招かれざる客だったんです。家族は誰一人、故人がドナーになっっていたことを知りませんでした。父親を探し当てたものの、そのことが原因で、今度は多くの人を不幸にしました。彼にとって、新たな苦しみの始まりでした」

マリアは、大地がそういうことを調べ苦悩していたことを初めて知った。正直言って、驚きだった。大地は舌で乾いた唇を舐めると、再び喋りだした。

「別の悲劇も起きました。父親探しという同じ目的を持った子たちが、精神的に強く結びついているのは容易に想像できます。その中で、特定の男女が恋愛感情を抱くようになって不思議じゃない。あるカップルは父親を探し当てたら、結婚しようと約束しました。しかし、父親を探した結果、二人の父親が同一だと判明した。可哀想なことです。実は、これは単なる偶然とも言えない。その二人には、まだ59人の兄弟がいることがわかったからです」

マリアは、精子バンクを利用するときに感じていた漠然とした罪悪感がどこから来るのか教えられたような気がしていた。淡々と話す大地の言葉は、マリアに痛みをもたらず。大地に対して抱いていた申し訳なさとは違う次元での痛みである。マリアは一言もコメントを発することができずにいた。

「自分が何者か」という問いに答えるためだけに人生を送る。一生と言わないまでも、人生において、最も重要な時期を、そんなことだけのために費やす。ボくらにとって当たり前であることが彼らにとっては当たり前でないんです。もちろん、割り切って考えられる子供たちの中にはいるでしょう、でも、多くの子供たちが、スタートラインに立つまでに多大なエネルギーを費やさなくてはならない。この事実を知った時、ボクは衝撃を受けました。簡単に考えすぎていたと。花があなたのお腹の中で育っているという喜びと共に、とんでもない重荷を背負わせてしまっている、という意識が出てきました。そして、花が自分のDNAを引き継いでないと知った時、そのまま黙って別れを告げることも一瞬考えました。でも、でもですよ、花が成長して自分の父親を知りたいと思った時、実にややこしいことになるでしょう？ いろんな方法を駆使して父親を突き止めるかも知れない。でも、本当の父親を探し当てたとき、あなたが知っている父親との間に齟齬^{そご}が生じる。花も苦しむでしょうし、

あなたも苦しむでしょう。」

マリアは、心の疼きを感じながら質問した。

「私が使った精子は結果的にあなたではなかったのだから、それに、間違えたのは私なんだから、そこまで責任を感じる必要はないとは思わなかったの？」

「正直、花とあなたから逃げたいと思った時期がありました。まだ、花がボクのDNAを引き継いでると信じ込んでいた頃の話です。将来、花が背負うことになる十字架を思うと身体が締め付けられそうでした。そこから目をそらしたい、忘れてしまいたい。でも、逃げたって一緒なんです。離れていても、おそらくボクは一生その思いから逃げられない。むしろ離れている方がつらいのかもしれない、そんな風に思うようになりました。花の血液型を見たときには、本当に驚きました。シヨックだった。それがあなたのオーダーミスかどうかまではあの時点でわからなかった。わかっていたところで結論が変わっていたとは思いません。故意に間違ったわけじゃないんだから」

「故意でなかったかどうか、どうして分かるの？」

「どうしてって言われても……。考えたこともなかったけれど……。わざと違う人の精子を使って、ボクにウソをつく理由が何かありますか？ そんなことをしても何の利益にもならないでしょう？ それに、産婦人科受診のたびに送ってくれたメールの説明がつきません。嬉しそうなコメント、心細くなってる様子、何らかの理由で、あなたが男性に対して恐怖心を抱いている一方で、寂しさも併せ持っているんじゃないかって、そんな風に感じましたけど。何か予期せぬことが発生したと考えるのが普通じゃないでしょうか。第一、ボクがあなたに精子を使ってくさいと申し出たことで、あなたの精子選びに影響を与えたことは事実でしょう？ 無関係だとは言えない。ところで、花がボクの子じゃないと気づいた時、あなたはまだその事実に気づいていないんじゃないかと思いました。いつかそのことについて言わなくちゃいけないと思っていましたが、恐らく

それを知った時にあなたはショックを受けるでしょうから……。プロポーズの理由を尋ねられた時、正直言って、困ってしまいました。どこから説明したらいいのかわからなくて。自分でもまだ動揺していましたし、出産直後のあなたに伝えるのは過酷だと思いました。」
これじゃあ、どっちがカウンセラーかわからないじゃない。マリアは苦笑した。大した人だ。
「ありがとう。私にはそれしか言えない。花のことも私のことも、本当に心配してくれて。花、将来苦しむかな」
「たぶん。でも、二人で精一杯育てて、少しでもその苦しみを和らげてあげるしかボクたちにやれることはないでしょう。そう信じるしかないです」

マリアは、複雑だった。自分の犯した罪の重さを指摘されたことで心に痛みが走った。しかし、一緒に助け合って行こうという、積極的な大地からの言葉は、マリアを暖かく包み込んでいる。結婚はしないと明言していた人が、こんな風に一生懸命になってくれる。

大地の台詞が蘇る。プロポーズをしてくれた時、どういふつもりかマリアが尋ねた時の答え。

……一言で説明するのは難しいです……

その通りだ。あの時、これだけの説明を受けて、果たして冷静に受け止められたか。今振り返って考えると、とてもマリアには自信がない。まず、大地が花の父親でないという事実をすぐに受け入れられたとは思えないのだ。

第20話 苦悩 2（後書き）

次回は、7月23日（木）に更新予定です。

第21話 大地の独白

マリアは端的にボクの行動を表現した。ボクの精子を使ってくれないかとお願ひした後だった。

……精子を売って、自分のDNAをタダで女性に育てさせる……勿論、随分ムシのいい話だということは自分で理解していた。しかし、ボクだけではなかったはずだ。彼女だって、”危険な男性”に近づかずに子供を産むことができないか、と考えていたはずだから。所詮、同じ穴の貉なのだ。人間は自分に都合のいいように物事を解釈する動物なのだと思った。

最初彼女と出会った時、ガラス細工のような繊細さと強さを同時に感じた。なかなかプライドの高い女性。ま、バリバリ仕事をしてシングルマザーになろうとしているのだから、無理してでも強がってないとやっていけないだろう。ボクはプライドの高い女性が嫌いではない。

彼女は、「これ以上私に近づかないで」というオーラをめいっばい出していた。苦い経験があるのだろう。もちろん、だからこそ、「精子バンク」を使って子供を作ろうと思ったわけだ。ボクがドナ―になろうと思った動機とほぼ同じ。

出会いのシチュエーションから、「恋愛」の要素がなかった。もう少し正確な表現をするならば、「恋愛」の要素を除外した付き合いを義務付けられていた。これはボクにとって意外な効用があった。余計な気を使わなくて済む。相手に気に入られる必要がない。精子を使ってもらえればラッキーだが、それだけの話だ。

ところが、何だか妙な具合になってきた。実際にボクの精子を使って彼女が妊娠したことを知ってボクは嬉しかった。嬉しすぎて怖かった。彼女は妊娠を機に少し変わった。かなり精神的に不安定になっっているのがボクにもわかった。カウンセリングなんて仕事をし

ている人が動揺する、というのは意外だった。妊娠が女性に与える影響はそれだけ大きいということなのだろう。所詮、一人の女性なのだ。悪阻で苦しんでいる彼女を見て、申し訳ないと思った。理屈ぬきに。困ったことがあったら、できる範囲で力になるうと思った。まさか、あの時点でプロポーズすることになるとは思っていなかった。

彼女は、定期受診のたびにメールをくれた。それはいつの間にかボクの楽しみになっていた。ボクは新米パパの気分を味わっていたのだ。そのことに気づいて少々狼狽もした。路線変更を考えてもいいのかも知れないと思ったが、恐らく彼女の方にはそのつもりがないだろう。男が嫌いだから精子バンクを利用しているのだ。遠くから見守るという方法しかあり得ないだろうと思った。これは結構しんどい。

マリアが妊娠中、ボクは次第に生まれてくる子供のことが心配になってきた。シングルマザーが増えてきたとは言え、育児の中で本来男性の果たすべき役割がいらないわけではあるまい。関わらない方がいいのだろうか、という自問自答。もしも、お願いした相手が、本当に不妊症に苦しむ夫婦だったなら、こんなことまで考えなかっただろう。自分が役割放棄をしているのではないか、という気持ちは、自分でどうすることもできなかった。かと言って、男嫌いのマリアと一緒にボクが生活するのは、本末転倒になるだろうし。

インターネットで精子バンクのことを調べるようになったのは、そんなジレンマを感じていた時期だった。精子バンクの仕組みや評価については、ドナーになる前に調べた。今回は、精子バンクを通して生まれてきた子供達のことだった。そして、ボクは衝撃的な事実を知った。眠れなかった。何とかしなくてはと思った。

ボクが取った最初の行動は、地中海病院に電話を入れることだった。

た。ドナー登録を中止してもらったためだ。しかし、その時点で、すでに4名の女性がボクの精子を購入したことがわかった。コーディネーターは、何を勘違いしたか、「来月振り込みますから」と言った。4名がボクの精子を購入した。そのうち一人はマリアだから、残りが3名。うまくいけば、いや、ボクにとっては、下手すれば、なのだが、3名の女性からボクのDNAを受け継いだ子供が誕生するのだ。ボクは動転していた。相手の女性について、コーディネーターは何一つ教えてくれなかった。当たり前と言えば当たり前だ。ボクはドナー登録の中止を申し出、5分くらい電話口でやり取りして、何とか了承してもらえた。翌日、正式な手続きを取るため、地中海病院に足を運んだ。

正直言って、ピンと来なかった。ああ、そうか、3名購入したのか、という程度（実際には、花は、ボクの子ではなかったのだから、3名ではなく4名のマリア以外の女性が、ボクの精子を購入したことになるのだが）。ボクの遺伝子を引き継いだ子供がボクの知らない所で誕生するかもしれない。その子たちが、大きくなって父親のことを知りたいと思うようになるかも知れない、そのことに対する罪悪感があったが、マリアが宿している胎児に対するような、切羽詰った実感はまるでなかった。どこか他人事めいた気持ち、それは、相手を知っているか知らないかの違いに起因していたと想像する。

何という皮肉だろう。ボクは精子バンクのドナーだ。と同時にボクの奥さんは精子バンク利用者と、他人の精子を使って妊娠したことになる。こんな話を他人にしたら、多分、間抜けな野郎だと笑われるのがオチだろう。しょうがないんだ。逃げるわけには行かなかったから。

でも結婚してみよう。どうしてあんなに結婚を怖がったのだろうと。ま、まだこれから本当の恐怖が始まるのかもしれないけど。だけど、少なくともボクにとって、独身時代より今の方が生活が充

実している。通常の結婚より沢山の厄介ごとを抱え込んでしまったけれどもね。ボクとマリアは、恋愛感情をすっ飛ばして、いきなり子供に対する愛情の共有だとか、そんな所から出発した。いいんだよ。順番がめちゃくちゃでも。彼女は、しっかりしているようで結構抜けている。だから今度だって番号を間違えたりしたんだ。でも、ボクにはそのことを責めたりできない。彼女が重大なミスを犯さないように、これから見張ってないと心配だ。

マリアはまだ花の世話で手一杯だ。それに、花がボクの子ではないことに気づいて間もないので、もつと先のことを考える余裕はないだろう。だけど、これから、ボクたちは沢山のことを話し合って決めていかなくてはならない。

例えば、二人目をどうするか、だ。こんなことを言ったら、多分マリアはびっくりするだろうが、もう一度精子バンクを使う、というのも選択肢の一つだ。だけど、ボク自身、あまりいいアイデアだとは思っていない。それは、ボクの精子が複数の女性に使われてしまったという事実があるからだ。不妊症であるとウソを貫き通すことができるなら、この選択肢もありだと思った。だけど、どこかでボクの精子を使った子供達がこの世に存在することが知れてしまう可能性がある。特に、花が自分のことを調べていくうちに偶然知ってしまうことは十分考えられるのだ。

二人目以降を諦める、というのも選択肢の一つだろう。もちろん、ボクたちの子供を作るというのも選択肢の一つだ。ただ、その時は、花に注ぐ愛情を怠らないように充分配慮する必要がある。今、ボクは花が可愛くて仕方がない。だけど、自分のDNAを持った子が出来たとき、その気持ちがどこまでも変わらないかと言うと、それは全く自分で想像ができないのだ。多少怖い気がしている。だから、普通のカップルみたいに、単純に二人目を、とはいかないのだ。

花への説明をどうするかとても厄介だ。ありのままを説明する

しかないのだろうと思う。相当傷つくだろうが。説明に困るのだが、だからこそ、ウソはつけない。早い段階で花には少しずつ説明をしておかなくてはならないだろう。マリアがどう判断するかにもよるが、少なくとも、この重荷は、花自身が背負っていかなくてはならない。ボクらが作った重荷だけれど、背負わされるのは子供だ。つらいけれど、ボクらが肩代わりできない。それが、ボクとマリアが取った行動の結果なのだ。花には何の罪もない。だけど、ツケは花に回る。ボクたちにできるのはきちんと花に説明をすることと、愛情一杯育てることだけだ。

ボクはマリアと結婚したことを決して後悔していない。ただ、安易に精子バンクのドナーになったことは浅はかだったと思っている。沢山の荷物をしょって、ボクはマリアと一緒に花を守っていく。恐らくこれから先、沢山の困難が待ち受けているだろう。だけど、花だけはどんなことがあっても、守っていかなくてはならないと思う。それがボクにできる唯一の償いだから。

第21話 大地の独白（後書き）

次回は、7月30日（木）に更新予定です。

第22話 母の独白

【大地の母の独白】

息子の結婚について、最初から私は不自然な所が多いと感じていました。一生結婚するつもりはない、と言っていた息子が突然結婚すると言いだしたのですから。それだけではありません。いわゆる『できちゃった婚』です。正直言つて、ショックでした。別に、私は考え方が古いとは思っていません。ご近所でも、『できちゃった婚』は当たり前、未婚の母も多いです。ご近所のそんな話を聞いて、私はその娘さんを白い目で見たこともありませんでしたし、若い人たちが、世間の目に縛られることもなく比較的自由にできる今の時代を、いい時代になったとも思います。正直、羨ましくさえあります。だけど、大地から初めて話を聞いた時には本当に信じられませんでした。世間からは巷にありふれた話だと思われるでしょう。そういう子供の親は決まって「我が子だけは」と思って動揺したりする、ということも聞き知っています。私のショックを説明しても、子供のことを理解したと誤解している典型的な馬鹿親と思われることでしょう。でも、私はどうしても腑に落ちません。まるで、そんな気配さえ微塵もなかった大地がいきなり言い出したのですから。しかも、子供が生まれた後にです。一言の相談もありませんでした。いくら何でも彼女が妊娠中に親に相談するのが普通でしょう。

親の私が息子の性格について説明しても、どこまで信用してもらえるかはわかりませんが、大地は思慮深い人間です。思いつきで行動することは少なく、どちらかと言えば慎重派。充分に計画を練って行動に移すタイプで、劇場的に恋愛に陥ったとしても、大地に限って、降って湧いたような『できちゃった婚』はにわかには信じられないのです。恋人がいる気配さえありませんでした。色気が出てきた印象もまるでなかったです。この一年間、何一つあの子は変わっていないのです。今まで大地を育ててきて、こんなことは初

めてです。大地という人間と、今回の騒動が、私の中で結びつかないのです。何か大きな理由があるのではないかと感じています。

大地から電話がかかってきたのは一年半ほど前のことでした。5歳の時に、花火で火傷をした時のことを聞いてきました。私が腎盂炎を起こして入院したときのことや、父親の血圧のこと、拳句の果てには祖父、祖母の話までしつこく質問しました。どうしてそんなことを聞くのか尋ねると、あの子は、「ちょっと」と言っ、答えませんでした。大地からそんな電話があつたこともすっかり忘れていましたが、今回のことを色々考えるうちに、ひよっこ思い出しました。もしかしたら、何か関係があるのだろうか。それとも私の考えすぎでしょうか。

もつと不自然なことがあります。孫が大地に似ていないのです。それまで感じていた不自然さは、「何となく」というレベルでしたが、まるで大地に似ていない赤ん坊を見せられた時、私はそれまで感じていた違和感に確信を抱きました。何もかもが変です。わからないことだらけです。一体、あの子は何をしたのでしょうか。何を考えているのでしょうか。

主人は、私の話を聞いて、「お前の妄想だ」と笑います。大地はもう大人なんだから、あいつの好きにさせたらいいと、呑気極まりないんです。来年春に結婚式を挙げる予定になっていますが、主人に言わせると、息子を取られるみたいで妬いているんだろう、どこでも母親はそんなもんだと言うのです。私は、こんなわからないことだらけの状態です。挙式することに抵抗を感じています。そんな私を主人は笑います。「結婚せずにいつまでも独り身の若者が増加している中で、無事、結婚できるのだからバンザイじゃないか」と。誰でもいいから、どんな状態でもいいから、結婚すればいいっていう問題じゃないと思うんですけど。

あちらのお母様は、スナックを経営なさっているとか。スナック経営が悪いとはいいませんけど、ご苦労なさっているのだなあと思います。お独りでマリアさんを育てられたというのですから。家庭環境から考えると、よく娘さんが無事に育ったものだと思います。いえ、厭味じゃないんですよ。ただね、離婚されているということ、少なからずマリアさんに影響を与えているのではないかと、まあ、どうしてもそんな風に考えてしまうのです。

それから、孫のことですけど（孫と言っているのかどうか怪しい限りですけど）、マリアさんは、「大地さんと私の子」と表現しました。自信を持った言い方で。ところが、お母様の方は、何となくお茶を濁す感じでした。一体、どう思っているのかしらと疑問が湧きました。赤ん坊の顔を見て、「え？」と思った私でしたが、きっぱりと言い切るマリアさんを見て、（ああ、やっぱり大地の子なのかしら）と思ったほどです。でも、お母様の態度はそうじゃなかった。長年接客業をなさってきたからでしょうか、やけに低姿勢で。本当にもう私にはわからないことだらけです。このまま式を挙げてもいいものかと悩んでいます。

【マリアの母の独白】

マリアの妊娠を知った時、嬉しくもありましたが、一方で悲しくもありました。どうしても恋愛下手なのかと思うと同時に、そんなマリアが不憫でもありました。申し訳ない気持ちで一杯でした。ところが不思議なもので、マリアのお腹がだんだん大きくなっていくと、孫の誕生が待ち遠しくなりました。マリアを妊娠していた時のことを思い出したりしたものです。それまでは、マリアの幸せ

な結婚を願っておりましたが、叶わない夢と諦めました。それも一つの人生と。起こってしまったことは仕方がないですからね。それに、不幸な結婚を続けていくことも大変なことですし、あの子にとつては結婚しなかったことがかえって良かったのだと思うように努めました。

ところが、花が生まれてすぐに、マリアにプロポーズしてくれた男性が現れたので、もう私はびっくりしました。こんなことがあるのでしょうか。それも、誠実そうな男性が、です。綺麗な目をした青年でした。神様に心から感謝しました。マリアを妊娠させた男性でないことは、すぐにわかりました。でも、どうして、大地さんのような男性が、マリアなんかプロポーズしたのでしょうか。不思議でなりません。マリアはいい子です。でも、一般的に言って、他人の子供を産んだばかりの女性にプロポーズする男性なんているでしょうか？ 今ひとつ、マリアと大地さんの接点が見えませんでした。

もっと驚いたのは、大地さんのご両親と始めてお会いした時のことです。あれは、マリアと花が無事に病院を退院して一週間くらいの頃でした。近くのレストランで簡単なお食事をしました。決して派手ではなくどちらかと言うと地味な感じのご両親でしたが、身なりはきちんとされていました。教養がおりのご両親と感じました。大柄で優しそうなお父様と知的なお母様と。お母様は、花を見た時、ちよつと驚いた風でした。恐らく、大地さんに似ていないからでしょう。ところが、マリアがきつぱりと言い切りました。「大地さんの子供を産めて幸せです」と。私はもうびっくりしてしまいました。だって、マリアはあんな風に堂々とウソをつく子ではありません。私は頭が混乱しました。そう言えば、マリアが私に尋ねたことがあります。「彼が、この子の本当の父親だと言ったら、お母さん、びっくりする？」と。あれは冗談なんかじゃなく本当のことだったのかしら？ でも、大地さんは、確か「結婚して頂けたら、父親、

ということになります。」「と言いました。私にはそちらの方が本当だと思えます。私には、何が何だかわからなくなりました。花の父親が誰かという事はマリアが一番知っているはずだからです。その後の会話は自分がどんな風に喋ったかさえまるで覚えていません。お会いする前は、まずはあちらのご両親に謝罪するつもりでありましたが、マリアの言葉を聞いて、私自身が混乱して謝罪どころではありませんでした。

ほどなくして、私は、謎の一部が見えてきました。マリアのマンションに夕飯を作りに行った時のことでした。部屋の片付けをしていた時に偶然見つけてしまったのです。『精子バンク』のパンフレットでした。マリアは、恐らく精子バンクを利用して妊娠したのでしょう。だから、あんな豪華な病院で出産したのです。マリアがきっぱり「大地さんの子」と言い切ったのは、大地さんの精子を使っていたからではないかと思っています。しかし、私の謎は完全には解けていません。大地さんの言葉と矛盾すること、花が大地さんに似ていないことの説明がつかないからです。でも、大地さんは、マリアにプロポーズした。精子バンクが接点であるとした私には考えられません。

私には詳細はどうでもいいことです。マリアが幸せになってくれれば。そして、大地さんと花と、家族三人が仲良く暮らしてくれれば、母親としてこれ以上の何を望むでしょうか。

第22話 母の独白（後書き）

次回は6日（木）に更新の予定です。

最終話 なつみの独白、マリアの独白

【なつみの独白】

マリアの子供を見て私は驚いた。だって、あんまりあの人に似ていたから。最初は気のせいと思った。でも、あの子の作る色んな表情を観察していたら、時おりあの人の表情がきれいに重なった。こんなことってアリ？　なんでマリアの子が優すくもに似ているワケ？　あいつ、私の友達にまで手を出したの？　証拠は何もない。でも、絶対にあの子の父親はマリアの旦那じゃない。写真の顔と全然違ったもん。それに……マリアの動揺ぶりも尋常じゃなかった。凶星だったからよ。

胸が苦しかった。優に対する愛情はもう微塵も残ってなんかいない。私の胸が苦しかったのは、なぜマリアが？　という怒りに似た感情の所為。優とマリア、一体どこに接点があつたのだろう。直接会つたことはなかったはずだ。マリアから届いた私あての年賀状？　学生時代のアルバム？

優の方がマリアに近づいたと想像することは不可能ではない。でも、マリアがそれに応じるというのは考えにくい。

もしもあの子が優とマリアの子だとすると、マリアは二股かけてたつてことになる。マリアにそんなことができるだろうか？　結婚したことでさえ私には驚きだったのに。おかしい。どうなっているのか全然わからない。

私にとってマリアとマリアの子に会ったことは衝撃以外の何物でもなかった。でも、もう忘れようと思っている。優とは離婚したのだ。もう私には関係ない。あいつのことで、これ以上心をかき乱されるのは沢山。当面はマリアとも距離を置く。あの子の顔を見たくないから。

【向田優の独白】

なつみは嫉妬深い女だった。そのくせ、子供はまだいらないう言
った。もともと俺は女に困ったことがない。結婚だって、別になつ
みじゃなきゃ駄目だってワケでもなかった。何か騙された気分だっ
た。なんでこんな奴と結婚したんだろうって。後の祭りだった。

浮気浮気って、なつみの奴、根拠もないのにしょっちゅう逆上し
てた。やってらんないんだよ。一度、酒飲み友達と危ないところま
でいったことは告白する。だけど驚いたね。まさか、探偵に尾行さ
れてるなんて思いもなかった。どんだけ金を払ったか知らんが、
誰の金使ってそんなマネしてんだよ。プロの撮影と思われる写真突
きつけられた時、ああ、もう終わりだと思ったね。女房に雁字搦め
にされて、でも子供は作りません、拳句の果て、他の女とお茶飲ん
ただけで逆上される、どこにそんな生活に耐えられる男がいる？

情けなかった。俺という男が、世間の目から見た俺と言う男が、
どんだけ価値があるのか無性に知りたくなった。なつみへのあてつ
けという意味もあった。精子バンクに登録しようと思ったのは、離
婚を決心した頃だった。

俺の精子は高い値段がついた。ざまあみろと思った。なつみに見
せ付けてやりたい気分だった。結局、実現しなかったが。実際に登
録されるまで半年以上が必要で、値段がついた時には、すでにあい
つとは離婚していたからだ。何だろう、あの頃は妙に清々しい気分
だったね。何て馬鹿な女だ、こんだけ価値のある男をとことん傷つ
けやがってと、復讐に成功した気分だった。

俺の精子は一ヶ月ほどで売り切れた。誰が購入したのか俺は知ら
ない。知ろうとも思わない。親父は誰だと将来捜されることになっ
たら厄介だけだな。

この前、大地の噂を聞いた。驚いたな。まさかあいつが結婚する
なんて。しかも、子供を作ってから結婚したらしい。あいつらしく

ないよな。あの堅物男が、先に子供を作って結婚だと。世の中想像できないことが起きるもんだな。

高校の頃から、あいつとはライバルのようなもんだった。断つておくがライバルというのは『成績』という意味のみでね。総合評価で行くと、俺の方がずっと上さ。あいつはちよつと変わった野郎だった。女にはもてなかったな。

俺は、学生時代から沢山のゲームソフトを開発してきた。その一つが大ヒットした。あの頃は、不思議なくらい女にもてた。なつみもその一人だ。あの頃は俺自身、ゲームに勝利し続けてた。なつみと結婚してからだ、急に負けが続くようになったのは。なーに、これからだ。大逆転が待ってるさ。

それにしても、いつか、大地の子供を見てみたいもんだな。あいつに似て、ぱつとしない子供なんだろうよ。

【マリアの独白】

大地のお母さんは、知的で優しそうだった。でも、目がちよつとだけ怖かった。今になって思うと、花が大地に似てないから不審に思っておられたのかもしれない。あの頃、私は、自分の間違いに気づいていなかった。だから、花のことを「大地さんの子」と言った。だって、本当にそう思っていたのだから。でも、結果的に私はウソをついたことになる。正直言つて気が滅入る。いつか説明しなくちゃいけないのよね。

母親は、最近妙に優しい。以前は、花の顔や髪の毛の特徴をよく口にしてたのに、最近は全然言わなくなった。大地に似てるとか似てないとか、そういうこと一切。かえって不気味なくらい。言つても仕方のないことだと思つているのかもしれない。

なつみからはあれから全然連絡が来ない。忙しいのかな。優さんと結婚した当初はとても幸せそうだったのに、すぐに上手くいかな

くなった。結婚式は海外で挙げて、私は出席しなかったから、とうとう旦那さんの顔も知らずに終わった。そのうち会う機会があると思っていたのに。頭が良くて、イケメンだと聞いていた。だけど、ちよつと自己愛の強い人みたいで、話を聞いてて、ちよつとやだなと思ったことを覚えている。別れて正解だったのよ。早くなつみに次の幸せが来ますように。

時々、花のことを考えると落ち込むことがある。だけど、私は一人じゃない。一つ一つ解決していけばいいこと。大地がいてくれるから。彼と協力してこれから二人で色んなこと乗り越えていく。

Ⅱ 完 Ⅱ

最終話 なつみの独白、マリアの独白（後書き）

読者の皆様、長い間、どうもありがとうございました。

非常にデリケートな問題をテーマにしましたので、常に悩みながら話を進めてきました。私自身、少々消化不良の感があります。

しばらくお休みを頂いて、また、全然違うタイプの物を提供したいと考えています。 GFJ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3129g/>

Sperm Business

2010年10月8日13時54分発行